日本赤十字豊田看護大学

研究シーズ集 2026

学校法人日本赤十字学園
日本赤十字豊田看護大学
Japanese Red Cross Toyota College of Nursing

日本赤十字豊田看護大学　研究シーズ集について

日本赤十字豊田看護大学では関係機関との連携強化を図ること、共同研究を推進することを主な目的として、研究シーズ集を作成しております。

本学の各教員の専門分野や研究内容を知っていただくことで、皆様の研究のサポート等にご活用いただき、さらには関心のある方々との連携や、共同研究を進めていく機会となることを期待しております。

各教員が講義・研修可能な内容も掲載しておりますので、ご興味のあるテーマがございましたら、ぜひお気軽に日本赤十字豊田看護大学事務局までご連絡いただければ幸いです。

本学では、大学院看護学研究科　修士課程を開設し、研究者・教育者・高度実践者を養成しております。一部だけ大学院の教育を受けてみたいという方のために、「科目等履修生」、「履修証明プログラム」の制度を設けております。「科目等履修生」は、大学院で開講されている科目を1科目から学ぶことができます。「履修証明プログラム」は「看護教育プログラム」、「看護研究プログラム」、「災害看護実践プログラム」を開設し、これらのプログラムは職業に必要な能力の向上をはかる「職業実践力育成プログラム（BP）」としての認定を受けています。また、博士課程も開設しております。

あわせてご紹介いたしますので、ご不明点等ございましたらお気軽にお問い合わせください。

皆様からのご連絡を心よりお待ちしております。

令和8年9月

【お問い合わせ】
日本赤十字豊田看護大学事務局
E-mail　info@rctoyota.ac.jp
TEL　　0565-36-5111

2026年度　教員一覧

	職名	領域	氏　　名	タイトル
1	学長・教授		百瀬　由美子	認知症高齢者ケア・身体拘束最小化・高齢者の防災・減災対策に関する研究
2	学部長・ 学務部長・教授	基礎看護学	山田　聡子	臨地実習指導・現任教育に関する研究
3	研究科長・ 教授	小児看護学	岡田　摩理	小児看護学教育および医療的ケア児に関する研究
4	学術情報センター・図書館長・教授	老年看護学	小林　尚司	生活の場の看取りケア・高齢者の地域活動促進
5	教授	専門基礎	下間　正隆	病院、介護施設の感染対策の向上
6		専門基礎	森田　一三	生涯にわたる口腔の健康創造をめざす研究
7		看護管理学	南谷　志野	看護師の持続可能なキャリアに関する研究
8		成人看護学	カルデナス　暁東	患者のセルフマネジメントと自己概念に関する研究
9		公衆衛生看護学	長谷川　喜代美	地域における住民の健康の維持・増進に関する研究
10		精神看護学	河野　由理	看護職のメンタルヘルス支援/外来看護、地域生活支援
11	キャリア支援室長・特命教授		伊藤　明子	災害・国際活動における人材育成・看護管理
12	准教授	一般教養	鈴木　寿摩	学習の深化を図る対話的・協同的学びの研究
13		一般教養	松崎　久美	高等教育の国際化に関する研究
14		基礎看護学	巻野　雄介	看護技術や看護教育におけるDXに関する研究
15		成人看護学	石黒　千映子	がんサバイバーの「自分らしく生きる」を支える
16		成人看護学	栩川　綾子	現象学をもとに看護の成り立ちを捉え直す
17		成人看護学	渡邉　直美	喉頭摘出術を受けた患者のQOL向上に関する研究
18		災害看護学	藤井　愛海	災害関連死という防ぎえた死の予防に関する研究
19		老年看護学	清水　みどり	介護保険施設のケアや看取りに関する研究
20		老年看護学	天木　伸子	認知症ケア、高齢者の摂食嚥下障害に関する研究
21		在宅看護学	深谷　由美	地域で暮らす人々を支援する支援者に関する研究
22		小児看護学	神道　那実	子どもの慢性疾患・プレパレーションに関する研究
23		精神看護学	原田　真澄	精神障がいをもつ人とその家族の支援に関する研究
24	講師	基礎看護学	竹内　貴子	学生への看護過程の教育に関する研究
25		基礎看護学	大西　幸恵	プロフェッショナリズム教育に関する研究
26		看護管理学	田中　慎吾	病院における看護組織のマネジメント
27		老年看護学	近藤　香苗	高齢者・慢性呼吸器疾患患者の健康支援に関する研究
28		在宅看護学	大林　実菜	心不全療養者の支援に関する研究
29		母性看護学	千葉　朝子	母乳育児をする母親・女性の心地よさに関する研究
30		小児看護学	遠藤　幸子	地域における小児看護・保育保健における多職種連携
31		小児看護学	神谷　美帆	子どもの力を支える看護に関する研究
32		精神看護学	飯田　大輔	システム理論に基づく組織への支援
33		公衆衛生看護学	大森　美保	職場のソーシャル・キャピタルに関する研究
34	助教	基礎看護学	高下　翔	エコーを用いた全身麻酔患者に関する研究
35		基礎看護学	福岡　友理恵	実地指導者に関する研究
36		基礎看護学	山中　大輔	看護系大学におけるキャリア教育に関する研究
37		基礎看護学	三浦　翔子	医療的ケア児の看護ケアに関する研究
38		専門基礎	高見　精一郎	
39		成人看護学	田口　栄子	看護の場におけるユーモアの意味と活用の研究
40		成人看護学	谷口　純平	せん妄発症予防に関する研究
41		成人看護学	石田　咲	高齢者の口腔ケア・感染予防に関する研究
42		成人看護学	石原　佳代子	看護職・介護職の口腔ケアに関する研究
43		老年看護学	段　暁楠	高齢者のエンドオブライフケア・センサーとIoT機器
44		在宅看護学	宝木　百代	介護支援専門員の医療職者との連携に関する研究
45		母性看護学	草深　真菜	周産期における災害対策に関する研究
46		小児看護学	鳥居　賀乃子	新生児看護・小児看護に関する研究

百瀬　由美子（Momose Yumiko）

学長・教授　　老年・在宅看護領域



認知症高齢者ケア・身体拘束最小化・高齢者の防災・減災対策に関する研究

◆研究シーズの内容

1．認知症高齢者ケアの質向上を目指した研究：

認知症高齢者の数は急増していますが、適切なケアが受けられないために症状が悪化する場合もあります。病院や高齢者施設、在宅ケアに携わる看護職、ケアスタッフ、そして学生が、臨場感のある教育が必要と考え、認知症模擬患者を活用した教育プログラムを開発しました。また事例検討をもとにケア場面を再現した動画教材も作成しました。これらを用いて看護職等の認知症高齢者への対応力向上をめざした研修会を企画・実施し、教育効果を検証する研究を継続的に行っています。現在は対象をアジア圏に拡大し、台湾、ベトナムにおいても研修を実施しました。タイの赤十字看護大学とも共同研究を始めています。

2．身体拘束最小化に関する実装研究：エビデンスのある教育プログラムに基づいて病院の管理者・スタッフの皆様と一緒に取り組んで身体拘束最小化を目指していきたいと思います。

3．　災害時要援護者防災・減災対策モデルの構築に関する研究：認知症対応型グループホームを拠点とした防災・減災対策の構築に取り組み、避難訓練も一緒に行いました。

◆研究者からのメッセージ

住み慣れた地域で人生の最終段階まで、その人らしく安心・安全に暮らせるために高齢者や家族への支援や質の高いケア方法の開発について、対象者自身や実践する人々とともに取り組んでいきたいと考えています。日頃の看護実践で何とかしたいと感じる課題がありましたら、現場の状況を教えてください。一緒に学びながら、考え、改善に向けて取り組んでいければと思っています。

◆講義・研修可能な内容

1）認知症高齢者ケアに関する課題、 2）病棟における身体拘束最少化に向けた取り組み、 3）高齢者のせん妄ケアに関する課題、 4）看護実践で感じる倫理的ジレンマへの対応などについて、事例検討や、百瀬研究室で学んだ老人看護専門看護師と共に演習を交じえながら臨床現場の課題に取り組んでいければと思っています。

◆研究キーワード

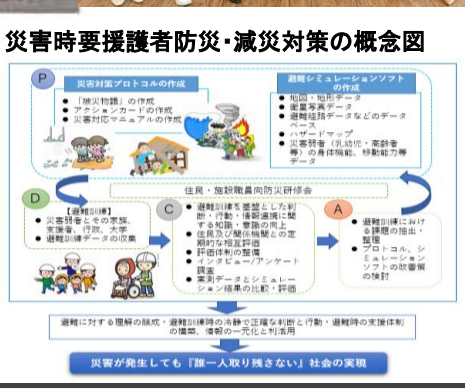
認知症高齢者看護、身体拘束最小化、高齢者の防災・減災対策、高齢者の口腔ケア、看護倫理













山田　聡子　（Yamada Satoko）

学部長兼学務部長・教授　　基礎看護学領域



臨地実習指導・現任教育に関する研究

◆研究シーズの内容

１．臨地実習指導者の役割行動に関する研究

臨地実習は看護学基礎教育において欠かせない教育方法です。臨地実習指導者のみなさんは、その教育方法において大変重要な役割を担っています。学生たちは、臨地実習指導者みなさんの看護実践や看護に向き合う姿勢をモデルとして看護学への学びを深め、将来の自己の看護師像を描きます。では、臨地実習指導者皆さんの役割とはどのようなものでしょうか。これまで、その役割を研究で明らかにしてきました。研究成果に基づき、臨地実習指導者さんご自身が自己評価できる指標の開発に取り組んでいます。

２．現任教育に関する研究

院内研究の成果評価、実地指導者や研修責任者の役割、院内研修の効果に関する研究等、医療機関における現任教育に関する研究に取り組んでいます。

◆研究者からのメッセージ

社会の変化に応じて看護教育も転換点を迎えています。これからの医療界・看護界を担う人材を育成していく上で、何をどのように教育することがふさわしいのでしょうか。看護基礎教育において欠かせない臨地実習、新人教育、現任教育など、本質を見極めながら、従前の考え方にとらわれず、皆さんと一緒に、柔軟に創造的に挑戦的に考えていきたいと思っています。

◆講義・研修可能な内容

1. 臨地実習指導者の役割に関する研修
2. 看護基礎教育の動向に関する研修
3. 臨床における看護研究の進め方に関する研修

◆研究キーワード

臨地実習指導者　現任教育　看護研究

岡田　摩理　(Okada Mari)

教授　　小児看護学領域



小児看護学教育および医療的ケア児に関する研究

◆研究シーズの内容

1．思考を育てる看護教育の指導方法（学部生および専門看護師）

看護教育では、技術の基盤となる思考力の育成が重要だと考えています。思考力は、安心できる環境で楽しく学ぶことや、適切な対話・振り返りの中で養われることを研究的に明らかにし、その成果を参考書としてまとめてきました。課題のある学生の態度面も含めた指導方法についても検討しています。

2．医療的ケア児と家族の支援の在り方（多職種連携を中心に）

近年、医療的ケア児の増加に伴い、病院での看護のみならず、地域の訪問看護、福祉施設、教育施設などの幅広い分野で、看護の力が必要となっています。私達のチームが研究を始めた10年以上前と比較すると沢山の進歩がありますが、未だ過渡期であり、多職種連携や対策には課題があります。子どもや家族にとってどういう形がベストなのか、一つ一つ丁寧に考えることで、改善の道につながると信じています。

◆研究者からのメッセージ

看護教育については、学部生のみならず、専門看護師コースにおける思考の育成にも取り組んでいます。経験を重ねたベテランの能力に加えて、体系的な知識と深い思考力、根拠をふまえた分析力を養うことで、子どもや家族の最善の利益を実現する看護師になれることを研究的にも明らかにしたいと考えています。

医療的ケア児支援については、臨床現場の皆様とともに、よりよい支援を模索したいと考えています。沢山の実践家のお力を借りながら、研究を行っています。

◆講義・研修可能な内容

1．看護基礎教育や小児看護領域における学生指導について

2．医療的ケア児支援に関すること

3．子どもや家族の権利や倫理に関すること

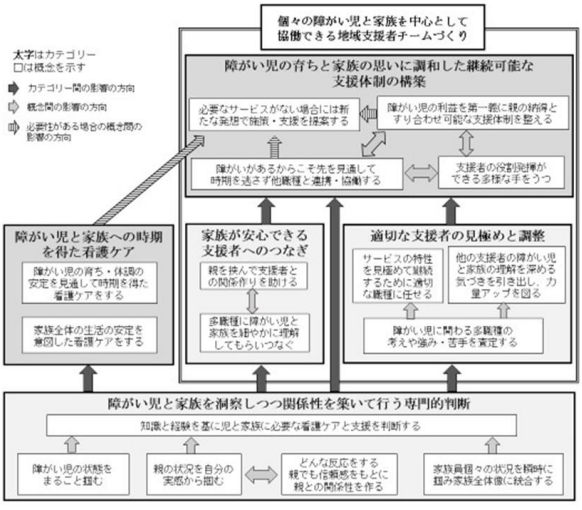
◆研究キーワード

小児看護学教育　医療的ケア児　多職種連携　子どもの権利や倫理

学生用参考書　　**教員・指導者向け参考書**







障がい児の在宅生活を専門的に支援する看護師によるコーディネーションのプロセス
日本小児看護学会誌，Vol.32，P9-17，2023.

小林　尚司　(Kobayashi Naoji)

教授　　老年看護学領域



生活の場の看取りケア・高齢者の地域活動促進

◆研究シーズの内容

1．生活の場における看取りケア

特別養護老人ホームの看取りケアとは何かを現場の看護師とともに考え、実践方内容を作ってきました。現在では、利用者のほぼすべての方が施設内看取りを希望するとともに、その希望に応えることができるようになりました。引き続き、介護施設のよりよいケアとは何か、施設の特徴に応じて探っています。

2．高齢者の地域活動推進

現在は、地域の課題は地域で解決を図る行政運営が求められるようになりました。その際に重要になるのが、地域に住むまだまだ活動力のある高齢者が、地域の課題解決に向けた活動に参加していくことです。それは、地域課題の解決だけでなく、高齢者自身の健康を増進させます。そんな高齢者の参加を促進する活動が作れないかと考えています。

◆研究者からのメッセージ

平均寿命は現在も延びており、老いてからも長く生きる人が増えるとともに、その期間が延びていると言えます。そのため命の続く間、可能な限り自立的・健康的にその人らしく生きることが、とても大切なことだと考えます。老いてからの、自立や健康、その人の幸せとは何か、そのために求められる支援はどのようなものかを、現場で実践する皆さんと考えたいと思います。

◆講義・研修可能な内容

老年期、認知症については、講義・研修ができると思います。また、現在は複数の病院で看護研究の指導に携わっています。

◆研究キーワード

エンド・オブ・ライフ・ケア　介護施設　地域共生

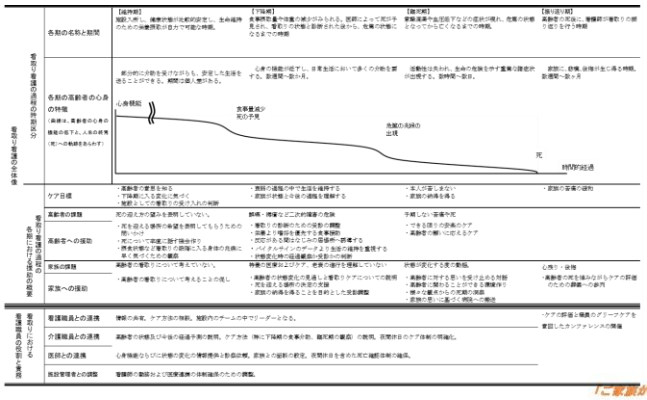
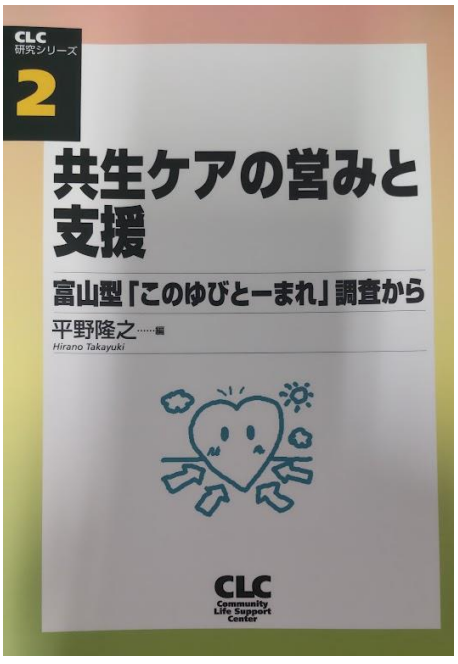




図1．看取り看護の概念的知識獲得のための研修教材



下間正隆　（Shimotsuma Masataka）

教授　　専門基礎（感染制御学）



病院、介護施設の感染対策の向上

◆研究シーズの内容と研究者からのメッセージ

全国の病院、介護施設の感染対策の向上に取り組んでいます。

◆講義・研修可能な内容

病院、介護施設の感染対策向上に関する講義、研修

◆研究キーワード

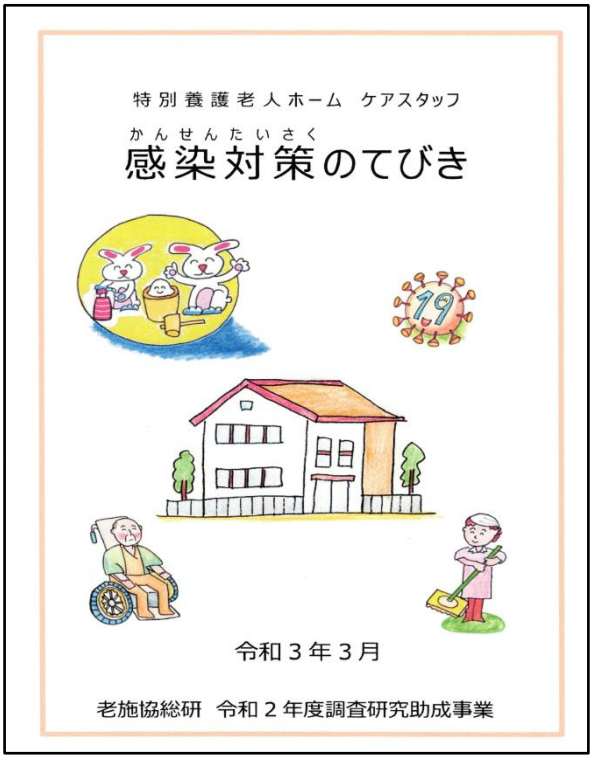
病院、介護施設、院内感染、薬剤耐性菌、感染対策、病院清掃



感染対策全般に関する書籍
2016年



CREに関する書籍
2018年



特別養護老人ホーム　ケアスタッフ
感染対策のてびき
2021年

日本赤十字豊田看護大学の
ホームページから
pdfのダウンロードができます



結核の職員健診
2015年



2021年

和歌山県看護協会主催
医療安全研修

コロナの後の
薬剤耐性菌
対策

2024年7月29日（月）
日本赤十字豊田看護大学
下間正隆
Infection Control Doctor

森田　一三　（Morita Ichizo）

教授　　専門基礎領域



生涯にわたる口腔の健康創造をめざす研究

◆研究シーズの内容

１．口腔機能を保持するための研究

80歳で20歯以上を保有し、生涯、豊かな食生活ができる、8020を達成するための方法を明らかにすることを研究します。歯の数のみでなく、口腔機能の維持・向上に関する研究を進めています。

２．人工知能による口腔の実画像識別技術の研究

口腔の実画像に対する人工知能による識別能力の性能評価や開発を行います。また、治療した部位の識別や治療に用いた歯科材料の識別をする人工知能の開発を進めています。

３．新型コロナウイルス感染症の影響に関する疫学的研究

新型コロナウイルス感染症の流行により人々の行動に変化が起き、行動制限がなくなった現在も様々な影響が続いています。歯科受診行動の変化による受診機会の喪失についての研究を進めています。

◆研究者からのメッセージ

口腔機能の低下が全身の栄養状態の悪化、そしてフレイルを招き、高齢者では要介護状態に至るという機序の理解が近年再認識されています。人々の口腔機能の維持には幼少期の口腔機能の獲得や良好な生活習慣、生涯にわたる歯の保有が求められます。すなわち、ライフコースの視点での口腔の健康への対策が肝要となります。さらに社会的な背景も踏まえた、健康となるための環境を創造することが、人々の生涯にわたる口腔の健康をもたらします。

◆講義・研修可能な内容

歯科に関する講義や研修を行うことができます。特に地域歯科保健や学校歯科保健、予防歯科に関わる内容について、公衆衛生、疫学の視点から行います。

◆研究キーワード

歯科学　８０２０　公衆衛生学　疫学　統計学　人工知能

最近の研究論文

2026 Mastication and Swallowing Times Associated with Eating Satisfaction Among Community-Dwelling Older People

2024 Changes in the Frequency of Dental Clinic Visits, Expenses, and Treatment Type During the COVID-19 Pandemic in Japan

2024 畳み込みニューラルネットワークにおける前歯部画像の回転不変性に関する予備的研究

2023 オーラルフレイルが現れる年齢の推定の試み

2023 Impact of the Coronavirus Disease 2019 Pandemic on Dental Visits in Japan

2023 Discordance between hyposalivation and xerostomia among community-dwelling older adults in Japan

2022 Comparison of two alcohol hand rubbing techniques regarding hand surface coverage among hospital workers: a quasi-randomized controlled trial

2021 高齢者における服薬薬剤成分数と口腔機能低下の関係

2020 Application of Deep Learning in the Identification of Cerebral Hemodynamics Data Obtained from Functional Near-Infrared Spectroscopy: A Preliminary Study of Pre- and Post-Tooth Clenching Assessment

2020 口腔機能低下に伴う栄養障害に対する介護職や医療職の認識状況の特徴

2020 The effect of a 5-year hand hygiene initiative based on the WHO multimodal hand hygiene improvement strategy: an interrupted time-series study

2020 人工知能による前歯部上下反転画像の識別に関する予備的研究

2018 Brain activity in response to the touch of a hand on the center of the back

南谷　志野　（Nanya Shino）

教授　　看護管理領域



看護師の持続可能なキャリアに関する研究

◆研究シーズの内容

１．短時間勤務看護師との協働に関する研究

看護師のキャリア継続の形として短時間勤務が増え、特に子育て中の看護師の就労環境は整いつつあります。一方で、看護チーム内では気遣いや業務負担の偏りが生じています。そこで、短時間勤務とフルタイム勤務の双方から、多様な働き方をする看護師の協働の在り方を検討しています。

２．キャリア・ショックの意味づけに関する研究

予期せぬ出来事によって強い感情の揺れが生じる「キャリア・ショック」を、看護師がどのように意味づけ、持続可能なキャリア形成へとつなげているのかを明らかにしたいと考えています。

３．看護管理者の成果の可視化を目指した研究

看護管理者による優れた実践がもたらす成果を明らかにしたいと考え、研究に取り組んでいます。

◆研究者からのメッセージ

看護師が安心して働き続け、成長し続けられるキャリアを支えることを目指しています。働き方の違いによる協働の課題や、突然の出来事によるキャリアショック、看護管理者の実践がもたらす成果など、現場で見えにくい経験を丁寧に捉え、より良い職場づくりにつなげたいと考えています。

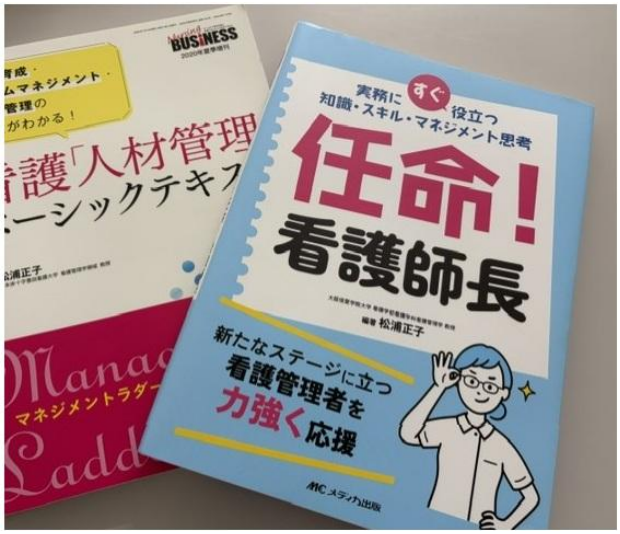
◆講義・研修可能な内容

看護職のキャリア（キャリア・デザイン、キャリア開発、働き続けられる職場環境）、組織行動（リーダーシップ、モチベーション）、多職種協働（タスク・シフト／シェア、看護補助者との協働）、組織分析と業務改善　など

◆研究キーワード

キャリア　就業継続　職場環境　協働　短時間勤務　認定看護管理者





カルデナス　暁東(Cardenas Xiaodong)

教授　　成人看護学領域



患者のセルフマネジメントと自己概念に関する研究

◆研究シーズの内容

1．慢性の病気をもつ人のセルフマネジメントに関する研究

慢性の病気をもつ人は，疾患の不可逆的な変化により治癒が望めないため，生活の中に治療を取り入れ，生涯にわたり病気を管理していく必要があります．これまでに，主に2型糖尿病やアトピー性皮膚炎，SLEの慢性の病気をもつ患者のセルフマネジメント能力を高める研究を行ってきました。現在は慢性心不全患者への継続看護、ACPや尋常性乾癬の患者のセルフマネジメントに関する研究も行っています。

2．慢性の病気をもつ人の自己概念に関する研究

疾患の症状や治療薬の副作用によって，ボディイメージの変容が生じてしまう患者は，周囲の人々の関わりを自ら遮断しネガティブな感情を抱きやすく，患者のQOLの低下を招きかねません。これまでに患者が語った【なりたい自分像】を表現するメイクセラピーを用いて，患者のボディイメージの再形成とQOLの向上に関する研究を行ってきました。今は外見変化のあるSLE女性患者に対するメイクセラピーによるベネフィット・ファインディング獲得と生活の質の向上における効果を評価する研究を行っています。

◆研究者からのメッセージ

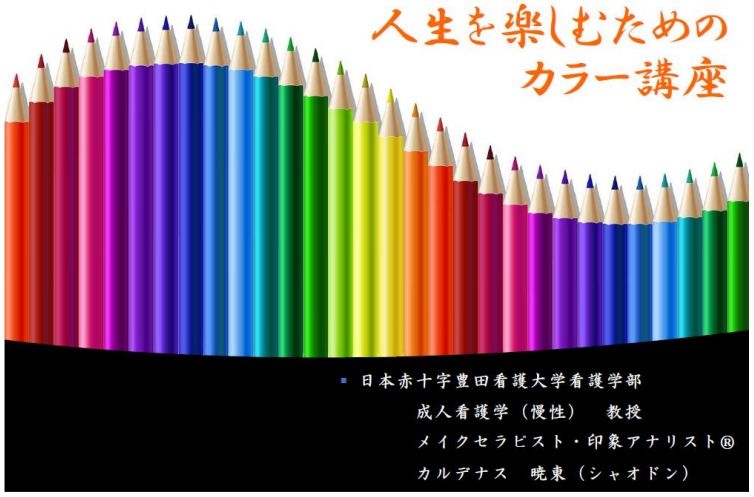
慢性の病気をもつ人々は，病気の体験からポジティブな意味を見出し，病気をマネジメントしながらイキイキとした社会生活が送れるため，その人らしさを尊重したオーダーメイド的な看護ケアについて，患者・家族，看護職を含めた関連医療従事者とともに検討していきたいです。

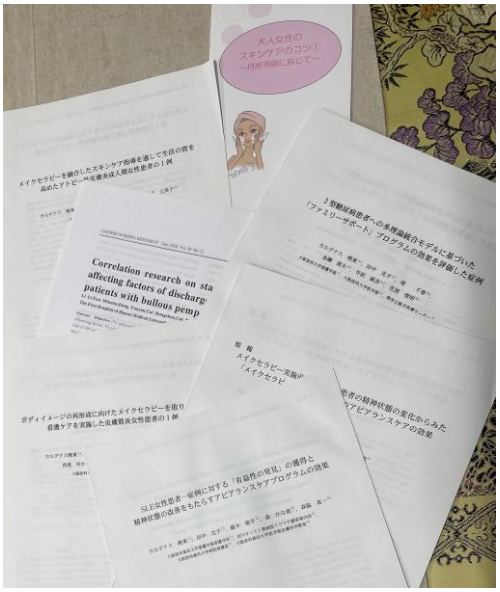
◆講義・研修可能な内容

- 外見変化のある患者の自己概念，特にボディイメージの再形成をもたらすメイクセラピーやカラーセラピーについて
- 慢性の病気を持つ患者のセルフマネジメントへの看護支援について
- 慢性心不全患者へのACP支援について

◆研究キーワード

慢性疾患，セルフマネジメント，ボディイメージ，自己概念，ACP





長谷川　喜代美　（Hasegawa Kiyomi）

研究科長・教授　　公衆衛生看護学領域



地域における住民の健康の維持・増進に関する研究

◆研究シーズの内容

1．要介護高齢者及び介護家族への支援に関する研究

高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けることができるようにするためには、要介護高齢者を含む家族のセルフケア能力を高めることが大切です。高齢者や家族がそれぞれ現状を肯定的に受けとめ前向きに生活を送ることができるようにするための支援のあり方について、研究に取り組んできました。

2．地域防災のしくみづくりに関する研究

地域防災では、住民自身による日ごろからの備えが重要と考えます。地域住民が主体となって防災に取り組むためのしくみづくりについて研究にとりかかっています。

◆研究者からのメッセージ

当事者のもつ力を高め、その人自身が望む生活を継続できるようにするための支援について、当事者や支援者の方々とともに考えていきたいと思います。

◆講義・研修可能な内容

地域における家族支援

◆研究キーワード

地域　健康づくり　家族支援

河野　由理　(Kawano Yuri)

教授　　精神看護学領域

看護職のメンタルヘルス支援/外来看護、地域生活支援

◆研究シーズの内容

1．精神的な健康課題をもつ人とその家族への支援

精神疾患をもつ人、身体疾患と精神疾患を合併している人、精神的な健康課題をもつ人とその家族への外来看護、および地域生活支援における看護職による支援と多職種連携のあり方の研究課題に取り組んでいます。

2．看護職のメンタルヘルス支援

看護職等の労働者のこころの健康に関する課題、児童生徒の精神保健問題の特徴と学校における支援や保健医療福祉機関との連携など

◆研究者からのメッセージ

近年、様々なこころの健康課題が社会問題となって現れています。子どもから高齢者まであらゆる年代の人々が社会で望む生活を送ることができるように、心身の健康を考えていきたいと思っています。慢性疾患をもつ人やターミナル期にある人、精神的な健康課題をもつ人やその家族、並びに看護職など働く人々のこころの健康について、日常の実践のなかで気になっていることがありましたら、ご一緒に考えていきませんか。

◆講義・研修可能な内容

1) 看護職のメンタルヘルス支援

2) 看護場面のコミュニケーション

3) 患者さんやその家族へのこころのケア

4) 教育心理学の観点からの指導者講習

◆研究キーワード

メンタルヘルス　地域看護　家族看護　精神看護、外来看護





伊藤　明子　（Ito Akiko）

特命教授・キャリア支援室長



災害・国際活動における人材育成・看護管理

◆研究シーズの内容

1．国際活動における看護職の人材育成

気候変動により多発する自然災害や様々な社会情勢により人道危機に苦しむ人々の数は、急増しています。あらゆる状況下で苦しむ人々を助けたいと国際活動を志す看護職の方々に対して、国際活動におけるジェネラリストの育成に従事してきました。その研修プログラムをもとに、継続的な人材育成や研修プログラムを検討します。

2．国際赤十字における看護管理者の育成

国際活動における赤十字の看護管理者は、多国籍の医療スタッフや多様な背景をもつ受益者とともに、赤十字の理念を具現化する上で重要な存在です。国際活動における看護管理者の活動内容や求められる能力等を明確にし、今後の人材育成の研修プログラムを構築することに取り組んでいます。

◆研究者からのメッセージ

国内の災害では、東日本大震災や熊本地震において、災害本部での調整・支援活動や病院支援のコーディネートに従事しました。また国際救援活動では大規模自然災害や紛争地域での災害救援活動や紛争地域での赤十字国際委員会の病院支援の責任者としての活動をしてきました。

人道危機に苦しむ人々に支援をできる人材を育成すること、また実践を研究的にまとめることの重要性を認識しています。皆様と一緒に様々な人道危機について考え、赤十字の看護師として、人として、私たちにできることから始めましょう。

◆講義・研修可能な内容

災害看護と災害時の看護管理・人材育成に関すること、国際救援・人材育成に関する講義、

赤十字について、国際人道法等について経験を交えながら講義・研修を行います。

◆研究キーワード

人道支援　赤十字　災害　国際救援　紛争　人材育成　看護管理



Japanese Journal of Disaster Medicine (J. J. Disast. Med.)
Copyright © 2024 by Japanese Association for Disaster Medicine

Vol. 29 No. 1
Printed in Japan

事 例 報 告

国際要員を目指す看護職の看護実践力の強化研修と今後の課題

伊藤　明子[1,2,*]　関塚　美穂[3]

要旨　海外の人道危機の増加に伴い国際救援活動のニーズは高まっている。国際活動に従事する看護職には幅広い対象の様々な疾患や外傷に対応できるジェネラリストとしての看護実践力が求められる。日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院では、国際要員を目指す看護職の実践力の強化研修制度を設けている。プログラムは研修者の背景や目標に基づき選択した研修部署をローテートする OJT と、国際医療救援部での Off-JT を融合させている。OJT 内容は EMT で提供する医療サービス 21/27 項目を網羅している。修了者23 名は、災害救援、紛争地での人道支援や開発協力などに延べ58 回派遣されており、3 名は管理的な役割を担う者もいた。成人教育を基盤とした本研修は、教育機関ではなく医療施設の臨床現場を活用したプログラムであり、より効果的な研修とするためには、国際基準として求められている看護実践内容を踏まえ、感染管理、Community Engagement and Accountability、Protection, Gender and Inclusion などを研修に含める必要がある。

I.　背景と目的

長年続く紛争や迫害による人道危機、気候変動に伴う大規模な自然災害の被災者数は急増している。日本赤十字社（以下、日赤）は、赤十字国際委員会（International Committee of Red Cross: 以下、ICRC）、国際赤十字・赤新月社連盟（以下、IFRC）、および、各国赤十字・赤新月社の相互の協力体制のもとに、資金・物資の提供や救援要員の派遣などの緊急救援・復興支援を展開し、さらに、長期にわたる被災者のニーズに対して活動を行っている[1]。

国際活動は、業務遂行ができる英語力（TOEIC 730 点以上）があり、国際赤十字で標準化された規定の研修を修了し、登録された国際救援・開発協力要員（以下、国際要員）によって行われている。その登録のプロセスは、英語での E-learning「国際救援・開発協力要員研修 I（World of Red Cross and Red Crescent: WORC）と安全管理研修 I（Stay Safe Personal Security）」を修了後、国際救援・開発協力要員研修 II（International Mobilization and Preparation for Action: 以下、IMPACT）、または、保健医療 Emergency Response Unite（以下、ERU）研修の修了をもって、国際要員として登録される。その国際要員は、2 国間協力（日赤と他赤十字・赤新月社）、IFRC、ICRC の事業に派遣される。

日赤の国際活動の派遣者数は、1961 年から 2021 年 9 月末まで 1964 名（うち看護職749 名）であり、1990 年代からは派遣者数が増加している。派遣組織別で

©ICRC

©日本赤十字社

日本看護科学会誌　J. Jpn. Acad. Nurs. Sci., Vol. 44, pp. 590–599, 2024
DOI: 10.5630/jans.44.590

資　料

日本赤十字社の国際救援活動に従事した Head Nurse の看護管理実践の内容

Content of Nursing Management Practices of Head Nurses Engaged in International Relief for the Japanese Red Cross Society

伊藤明子[1),2)],*，倉岡有美子[3)]
Akiko Ito, Yumiko Kuraoka

キーワード：人道支援組織，赤十字，看護管理，多様性，危機管理
Key words：humanitarian organization, Red Cross Society, nurse management, diversity, crisis management

Abstract

Objective: To elucidate the content of nursing management practices of head nurses engaged in international relief work for the Japanese Red Cross Society.
Methods: Semi-structured interviews were conducted with seven head nurses who had worked in international relief for the Japanese Red Cross Society. The interview data were analyzed qualitatively and descriptively.
Results: This study identified head nurses' nursing management practices, including embodying the Red Cross philosophy, making decisions as a manager of a humanitarian organization, effectively using limited resources, ensuring staff safety and responding to contingencies in unusual environments, respecting the diversity of beneficiaries and staff and building relationships with them, assisting staff to acquire and improve their knowledge and skills in international relief work, and engaging in self-management.
Conclusion: The head nurses embodied the Red Cross philosophy by building relationships with beneficiaries and staff, assisting staff to acquire and improve their knowledge and skills in international relief work, and maximizing limited resources in nursing management practice. They also ensured staff safety, responded to contingencies in unusual environments, and made a range of managerial decisions. Furthermore, self-management was fundamental to nursing management practice.

鈴木　寿摩　(Suzuki Suma)

准教授　　一般教養（英語）



学習の深化を図る対話的・協同的学びの研究

◆研究シーズの内容

１．批判的思考力育成を促す協同学習の研究

高等教育における「英語リーディング」授業では、語彙・文法知識を活用した英文理解にとどまらず、テキストの内容を批判的にとらえ、自らの経験に照らして解釈し、その学びを生活に役立てる深い読解力が求められます。このような批判的思考力を伴う読解力の育成を目指すため、協同学習を基盤としたLTD（Learning Through Discussion）が提唱されています。LTDを通じて個人やグループ内に起こるさまざまな認知的および態度的変容を観察・分析し、読解授業の改善を目指すことをテーマに研究しています。

２．ESP (English for Specific Purposes) としての看護英語の教授法の研究

「看護英語」「医療英語」など特定の目的のための英語学習には、専門用語の難しさに加え、用語の使用場面での専門知識が必要とされます。専門用語をいかに楽しく学ぶか、語学学習にいかに専門知識を組み込むかが課題です。また専門教育との連携を図ることも効果的なESP学習の鍵だと考えています。

◆研究者からのメッセージ

「英語は苦手」とよく耳にします。でも周りを見渡せば、たくさんのアルファベットやカタカナがあふれていて、それらは全て英語学習の「シーズ」です。既存の知識と単語が結び付くと「そうだったのか！」「わかった！」と感激するものです。そんな英語学習のコツをお伝えできたらと思っています。

◆講義・研修可能な内容

病院内での英会話

効果的な語彙習得法

◆研究キーワード

協同学習　LTD話し合い学習法　看護英語

松崎　久美　(Matsuzaki Kumi)

准教授　一般教養（英語）



高等教育の国際化に関する研究

◆研究シーズの内容

1．グローバリゼーションと高等教育の国際化

グローバル化した世界では、多様性への視線が注がれる一方で、世界モデルの価値観が築かれ教育の均質性は高まっています。高等教育においては、教育制度や教授言語の英語化など優位な立場をとる制度へと統一されている傾向があります。そうした国家や機関レベルの政策に対し、個人（ミクロ）はどのように高等教育を認識し、進学選択をしているのでしょうか。グローバリゼーションと高等教育の国際化が構築する社会と個人の関係を留学生の動向に着目して研究しています。

2　非英語圏における英語化と留学生の移動

グローバル化やインターネットの普及により、英語がリンガフランカ（世界共通言語）としての地位を確立し、学術世界においても研究・教育の中心言語となっています。これまで留学は英語圏が主流でしたが、非英語圏におけるEMI（English Medium Instruction）＝英語による学位取得プログラム、の拡大により留学の行き先は多様化しました。しかし、学術言語と社会の言語が異なる環境における留学は複雑な課題を呈しています。EMI留学という現象について研究をしています。

◆研究者からのメッセージ

留学は、英語を学ぶことを意味しているのではありません。ライフコースの一過程で、その動機と阻害する要因の関係を見出し、さらに留学経験を経てその動機の変容を認識するプロセスを理解することに取り組んでいます。留学という現象を単なる海外経験や語学学習と考えるのではなく、その背景にある社会構造を知ることで、日本社会や高等教育への示唆が得たいと思います。

◆講義・研修可能な内容

高等教育の国際化、海外留学制度と動向、高校生の海外進学、多様性理解

◆研究キーワード

高等教育　高等教育の国際化　海外留学　EMI

巻野　雄介　(Makino Yusuke)

准教授　　基礎看護学領域



看護技術や看護教育におけるDXに関する研究

◆研究シーズの内容

１．超音波画像診断装置（エコー）の看護技術への応用

エコーは侵襲を伴うことなくリアルタイムに体内を可視化する医療機器です。近年のこの装置の進歩は目覚ましく、その画像の鮮明さや持ち運びのしやすさにより、今ではナースフレンドリーなものとなっています。エコーを用いた研究も盛んに行われており、より安全で効果的な看護技術の開発にも役立っています。私はエコーを使った末梢静脈穿刺に関する研究に取り組んでいます。視診や触診ではわかりづらい静脈の位置や深さや太さといった特徴を正確に捉えることができるため、成功率の上昇に寄与することができます。

２．実習記録の電子化

医療分野でもDXが推進される中、看護学生においてもデジタル技術活用の端緒を得ることは重要だと考えます。これまで紙媒体で運用してきた実習記録をデジタル化し、効率的に物事を進め患者ケアを行う時間を確保する一方で、個人情報を慎重に取り扱うスキルを身につけさせたいと考えています。

◆研究者からのメッセージ

新たな看護技術の開発においては、臨床での実践と効果検証が不可欠です。臨床のみなさまと一緒によりよい患者ケアを目指した研究に取り組みたいと考えています。

◆講義・研修可能な内容

看護分野におけるエコーの使い方

病態生理を踏まえたヘルスアセスメント

など

◆研究キーワード

看護技術　看護理工学

エコーを使った末梢静脈穿刺に関する研究論文

JNSE, 8 : 86～100, 2021

Original Article

Validation of ultrasound-guided peripheral intravenous catheterization with a probe holder compared to the traditional technique: A single-case experimental study

Yusuke Makino[1]; Mika Miyagawa[2] and Michiaki Kai[3]

[1] School of Nursing, Japanese Red Cross Toyota College of Nursing
[2] Department of Nursing, Oita Memorial Hospital
[3] School of Nursing, Oita University of Nursing and Health Sciences

（研究にあたって作成した装置）

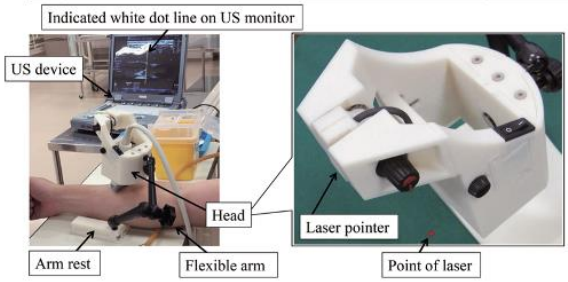


Figure 1　The probe holder

石黒　千映子　（Ishiguro Chieko）

准教授　　成人看護領域

がんサバイバーの「自分らしく生きる」を支える

◆研究シーズの内容

1. 婦人科がんサバイバーを対象とした心理教育プログラムの構築に関する研究

婦人科がん（子宮がん、卵巣がんなど）の治療を受けた人が、妊孕性の喪失など、疾患や治療に伴って生じる様々な出来ごとに対処しながら、その人が持っている「健康へと向かう力」を引き出すための心理教育プログラムを構築し、その効果を検証するための研究に取り組んでいます。

2. 造血幹細胞移植を受ける血液がんサバイバーのメンタルケアに関する研究

造血幹細胞移植を受ける血液がんサバイバーの、移植前から移植後までの心的体験を理解し、移植前から社会復帰後までの継続した心理的支援について、臨床心理士の立場から研究に取り組んでいます。

3. Multimorbidityのがんサバイバーのニーズを踏まえた外来での支援に関する研究

糖尿病を併せ持ちながら化学療法を行うがんサバイバーが抱いている支援ニーズと、外来看護師および特定分野の専門性を有する看護師による支援を明らかにしたうえで、外来における看護体制にあった支援モデルの構築を目指し、研究に取り組んでいます。

◆研究者からのメッセージ

がんサバイバー（がん体験者）が、様々な出来事に対処しながらも「自分らしく生きる」ことができるよう、がんサバイバーの方々および臨床の場で活動している方々と共に、ケアの研究開発に取り組んでいきたいと考えています。

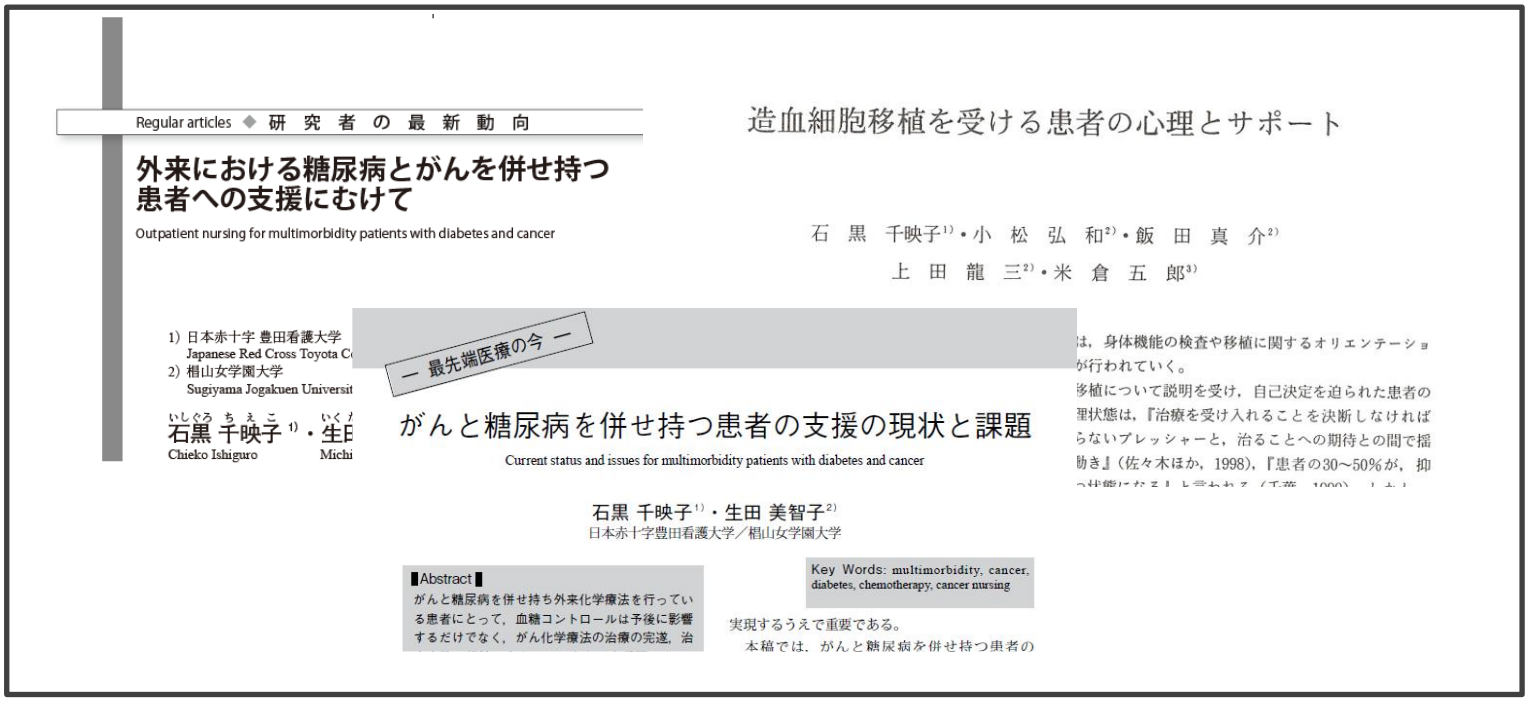
◆講義・研修可能な内容

大学では、慢性看護やがん看護、緩和ケア、心理療法に関する科目を担当しています。

皆様と一緒に学びを共有したり深められたりする場を提供させていただきたいと考えています。

◆研究キーワード

がんサバイバー　サイコオンコロジー　緩和ケア　Multimorbidity



Regular articles ◆ 研 究 者 の 最 新 動 向

外来における糖尿病とがんを併せ持つ患者への支援にむけて

Outpatient nursing for multimorbidity patients with diabetes and cancer

造血細胞移植を受ける患者の心理とサポート

石 黒 千映子[1)]・小 松 弘 和[2)]・飯 田 真 介[2)]
上 田 龍 三[2)]・米 倉 五 郎[3)]

一 最先端医療の今 一

がんと糖尿病を併せ持つ患者の支援の現状と課題

Current status and issues for multimorbidity patients with diabetes and cancer

石黒 千映子[1)]・生田 美智子[2)]
日本赤十字豊田看護大学／椙山女学園大学

Abstract
がんと糖尿病を併せ持ち外来化学療法を行っている患者にとって，血糖コントロールは予後に影響するだけでなく，がん化学療法の治療の完遂，治

Key Words: multimorbidity, cancer, diabetes, chemotherapy, cancer nursing

実現するうえで重要である。
本稿では，がんと糖尿病を併せ持つ患者の

栩川　綾子　（Tochikawa Ayako）

准教授　　成人看護領域



現象学をもとに看護の成り立ちを捉え直す

◆研究シーズの内容

１．現象学

現象学のモットーは、「事象そのものへ立ち返る」ことです。看護は、看護の質の向上のため、科学的な実践を求めます。一方で、患者にじかにかかわる看護実践は、どうしても科学的に説明できない事象があるのも事実です。そのような看護の事象は、現象学の見方を参考にすることで明らかにできます。それにより、これまでとは異なる新たな視点で事象の成り立ちを明らかにでき、看護の意味を考え直すことを可能にします。この魅力に導かれ、修士・博士課程また現在でも、現象学的研究を行っています。

２．看護師の実践

看護師は、看護をいかに成り立たせているのでしょうか。基礎教育では、看護過程という科学的な思考を習得してきました。しかし実際の看護は、思考だけの実践ではありません。人間は、身体を有しています。この身体の次元から患者と交流しながら、看護を成り立たせているのです。看護は、人間存在をもとにした実践であり、これこそが、看護が人間科学であるゆえんなのです。改めて、看護師の実践をその事象から捉え直してみると、その奥深さに驚かされます。

◆研究者からのメッセージ

看護は、人間が人間へ応答する人間的な営みです。看護師は、患者との交流を確かに感じながらも、それがはっきりと説明できず、もどかしさを感じているのではないかと思います。既存の概念や理論から考えるのではなく、まず看護の事象に立ち返りませんか？それにより、看護の意味が見えてきたとき、自分の存在をもって患者に向かい合い、確かに看護をしていたと自覚することが出来ます。

◆講義・研修可能な内容

現象学の思想を基にした、看護の成り立ちについて

質的記述的研究について

◆研究キーワード

質的記述的研究　現象学的研究　看護師の実践



原　著

身体が織りなす看護の営み

—急性期にある糖尿病足病変入院患者と看護師の関係の現象学的研究—

A Way of Nursing through The Physical Involvement with Patients
—A Phenomenological Study of The Interactions between Inpatients with Acute Diabetes Foot Lesions and Nurses—

栩川綾子 1),*
Ayako Tochikawa

キーワード：糖尿病足病変入院患者，現象学的研究，身体
Key words：inpatients with diabetic foot lesions, phenomenological approach, body

Abstract

Purpose: This study describes the experiences of nurses in interactions with inpatients with diabetic foot lesions, focusing on daily occurring situations where ward nurses respond in situations involving patients with foot lesions.
Methods: Using a phenomenological approach based on the body-theory of Merleau-Ponty, and data collected through field observations and interviews with individual nurses, we describe situations where nurses provided care for patients with foot lesions.
Results: Participant nurse C perceived an "absent-minded" feeling of a patient during the interaction when checking physical conditions of the patient. It was manifested in a slow and self-paced attitude unique to patients in diabetes treatment from which nurses gain information about the life of the patient before hospitalization. When participant nurse E perceived that the patient felt pain from the way of breathing and distorted facial expression during the foot lesion care, she put her hand on the arm of the patient. Reacting to this attitude of the nurse showing awareness of the pain, the patient developed fears during the daily care.
Conclusion: Nurses perceive important points for the nursing from the symptoms and distress expressed by patients. The perceptions of nurses are not subjective because they arise from the interactions with patients through the physical involvement, but are a key element to develop the relationship with patients.

原著

糖尿病足病変患者と看護師の入院時におけるかかわりの成り立ち

——身体性に注目して——

Building a Nursing Relationship with Hospitalized Patients with Diabetic Foot
——Focusing on the Embodiment——

栩川　綾子
Ayako Tochikawa

首都大学東京大学院人間健康科学研究科　Graduate School of Human Health Sciences, Tokyo Metropolitan University

本研究の目的は，糖尿病足病変入院患者を看護する看護師の経験から，患者とのかかわりがいかに成り立っているのかを身体性に注目して記述することである．足病変患者の看護経験がある看護師に，非構造化面接を実施し，現象学を手がかりに2名の参加者のかかわりを記述した．
参加者A氏は，患者の痛みやその生活の現状を自分の身体に接続させながら理解していた．また，足病変や健院を知覚することで，患者の過去や現在の治療状況・医療システムを背景にそれらの意味を捉えていた．参加者B氏は，患者の治療を共にするなかで，患者の苦悩や治療の意味を身体から分かるようになった．かかわりは，このような看護師の身体の経験をもとに成されていたのであった．
足病変患者への看護師のかかわりは，身体からの応答として成り立っていることが明らかになった．これは，知識をもとにして思考することとは別様の，身体で応じる中で自ずと生起するものと考えられた．
キーワード：糖尿病足病変入院患者，かかわり，現象学

The aim of this study is to describe how the relationship with patients is built in terms of the experiences of nurses who provided care to hospitalized patients with diabetic foot, focusing on the embodiment. Unstructured interviews were conducted with nurses experienced in caring for patients with diabetic foot. The relationship of two participants with their patients was described in the framework of phenomenology.
Participant A understood patients' pain and their living situation through body contact with them. In addition, by perceiving patients' diabetic foot or healthy limb, he grasped the meaning of these in context of the patients' past or current treatment as well as the medical system. Participant B understood the meaning of patients' distress and treatment through her body as she shared the patients' treatment. The relationship was built based on these experiences from body of nurses.
The relationship of patients with diabetic foot and nurses was found to be built responses from body. It was thought that this nurses spontaneously responded, which is different from thinking based on knowledge.
Keyword：Hospitalized Patients with Diabetic Foot, Relationships, Phenomenology

渡邉　直美　(Watanabe Naomi)

講師　成人看護領域



喉頭摘出術を受けた患者のQOL向上に関する研究

◆研究シーズの内容

１．喉頭摘出術を受けた患者の退院後の生活に関する研究

喉頭がんや下咽頭がん患者に行われる喉頭全摘術は、失声や永久気管孔造設に伴う日常生活の変容が大きく、退院後の生活への適応困難に陥りやすい術式です。そこで、喉頭摘出術によって生じる機能障害を術式から導き出し、その問題の推移、対処法について研究で明らかにしました。

２．喉頭摘出者の食道発声の獲得を目指した研究

食道発声は、喉頭がんや下咽頭がんで喉頭全摘術を受けた方が獲得を目指す代用発声法の1つです。長年、喉頭摘出者の患者会で行われてきた食道発声の訓練を観察研究によって整理して体系化し、応用行動分析学に基づく実験研究でその効果を検証する研究を行いました。また、食道発声で音が生成できるようになるプロセスやそのメカニズムを超音波診断装置で可視化しました。

現在は、食道発声の自己練習用アプリの開発と喉頭摘出者の嚥下に関する研究に取り組んでいます。

◆研究者からのメッセージ

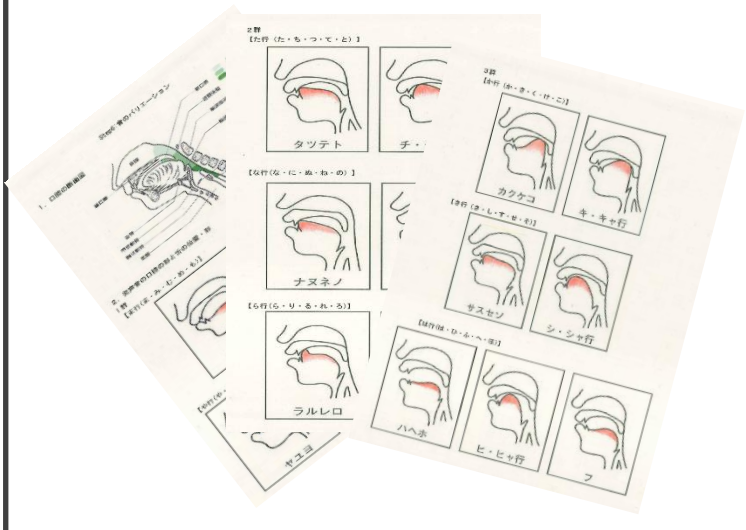
今後も喉頭摘出術を受けた方のQOLを維持できるような研究に取り組んでいきたいと考えています 。また、応用行動分析学のシングルケースデザインは、看護技術の習得、臨床での患者・看護師教育に適していること、超音波診断装置は、患者の非侵襲的に体内を可視化でき、的確な看護実践に繋がることについて広めていきたいと考えています。

◆講義・研修可能な内容

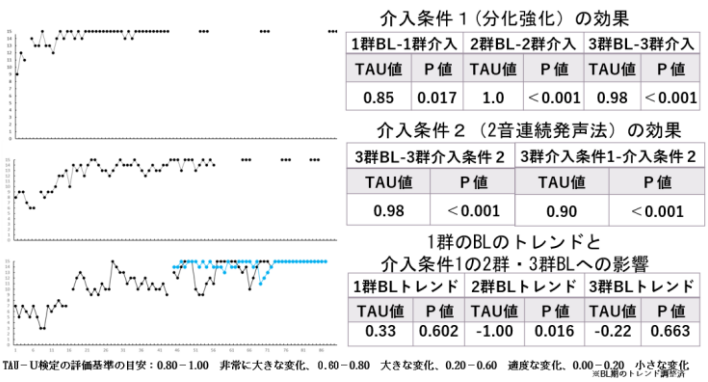
食道発声の指導、食道発声のの指導者向けの教育、シングルケースデザインの臨床での活用

◆研究キーワード

喉頭摘出者　食道発声　応用行動分析　シングルケースデザイン　超音波診断装置



食道発声訓練用パンフレットの一部



介入条件１（分化強化）の効果

1群BL-1群介入		2群BL-2群介入		3群BL-3群介入	
TAU値	P値	TAU値	P値	TAU値	P値
0.85	0.017	1.0	＜0.001	0.98	＜0.001

介入条件２（2音連続発声法）の効果

3群BL-3群介入条件２		3群介入条件1-介入条件２	
TAU値	P値	TAU値	P値
0.98	＜0.001	0.90	＜0.001

1群のBLのトレンドと介入条件1の2群・3群BLへの影響

1群BLトレンド		2群BLトレンド		3群BLトレンド	
TAU値	P値	TAU値	P値	TAU値	P値
0.33	0.602	-1.00	0.016	-0.22	0.663

TAU－U検定の評価基準の目安：0.80－1.00　非常に大きな変化、0.60－0.80　大きな変化、0.20－0.60　適度な変化、0.00－0.20　小さな変化
※BL期のトレンド無し

シングルケースデザインの結果の一部

藤井　愛海　(Fujii Megumi)

准教授　　災害看護学領域



災害関連死という防ぎえた死の予防に関する研究

◆研究シーズの内容

災害による死亡は、発災直後の外傷や急性疾患によるものだけではなく、避難生活に伴う生活環境の変化、医療・介護サービスの中断、慢性疾患の悪化などによって生じる「災害関連死」が大きな課題となっています。

1．セルフケア理論に基づく災害関連死発生要因の構造化

災害関連死を「発災後の生活過程において、健康維持に必要なセルフケアが十分に実施できなくなった結果として生じる健康状態の悪化」という視点から捉え、セルフケア理論を用いて災害関連死事例やインタビューを分析し、防ぎえた死（Avoidable death）につながる要因とその構造を明らかにすることを目指しています。

２．災害時要配慮者へのセルフケア支援モデルの開発

上記の研究成果を基盤として、高齢者、障がい者、慢性疾患を有する者など、災害時に自ら避難や健康管理を行うことが困難となる要配慮者に対し、セルフケア能力を維持・補完するための支援方法を検討し、防ぎえた死（Avoidable death）の予防につながる災害看護支援モデルの開発を目指しています。

◆研究者からのメッセージ

災害で助かった命を、その後の生活の中で失わないために、災害関連死という防ぎえた死（Avoidable death）の予防に取り組んでいます。セルフケアの視点から災害後の健康悪化要因を明らかにし、要配慮者への支援モデルの開発を通して、災害時にも健康と生活を守る看護の実現を目指します。

赤十字が長年培ってきた災害救護・地域支援の実践と研究を結びつけ、防ぎえた死を減らすための支援モデルの構築に貢献したいと考えています。

◆講義・研修可能な内容

・災害関連死と防ぎえた死（Avoidable death）の理解
・セルフケア理論に基づく災害関連死予防の考え方
・要配慮者の災害時支援と健康管理

◆研究キーワード

災害関連死　Avoidable death　防ぎえた死　災害時要配慮者　セルフケア　減災　災害看護

清水　みどり　(Shimizu Midori)

准教授　　老年看護領域



介護保険施設のケアや看取りに関する研究

◆研究シーズの内容

１．高齢者施設のケアの質向上を目指した研究

高齢者施設の入所者にとって食べることは心身機能の維持に必要なだけでなく、食への意欲は他の機能や意欲と比べて残存しやすいことから経口摂取支援は重要なケアテーマの一つです。しかし加齢に伴って誤嚥や窒息のリスクは高まることから、最後まで安全に安楽に口から食べていただくための研究をしています。

２．高齢者施設の看取りに関する研究

生活の場である高齢者施設において、人生の最終段階を安全に安楽に、その人らしく生ききることを支える看取りケアについて研究しています。

◆研究者からのメッセージ

老いても、障害があっても、認知症があっても、最後までその人らしく生ききることをサポートするのが老年看護の役割だと考えています。その方の経験や大切にされていることに思いをはせ、人生の最終段階を安全で豊かに過ごすための看護について考えていきたいと思います。

◆講義・研修可能な内容

高齢者施設の看護や看取り、認知症高齢者の看護

◆研究キーワード

高齢者看護、特別養護老人ホームの経口摂取支援　高齢者施設での看取り

天木　伸子　（Amaki Nobuko）

准教授　　老年看護領域



認知症ケア、高齢者の摂食嚥下障害に関する研究

◆研究シーズの内容

１．認知症ケアの質向上に関する研究

病院や高齢者施設で療養する認知症高齢者に対し、認知症の特性を踏まえつつ療養の場にあった認知症ケアを提供するためには、具体的にどのような看護実践を行うと良いか、ケア内容を言語化した認知症ケアの質評価指標を作成して活用をすすめています。認知症ケアに関する臨床での教育では、認知症模擬患者を用いたシミュレーション教育にて認知症ケアの質向上のための教育実践を行っています。

２．高齢者の摂食嚥下障害に関する研究

加齢の変化によって摂食嚥下機能の低下が進むと、咽頭残留が生じやすくなり誤嚥リスクを高めます。咽頭残留による繰り返される誤嚥は誤嚥性肺炎のリスクを高めることから、咽頭残留を除去するケアプログラムの開発を行っています。また、咽頭残留のスクリーニングには、小型超音波診断装置（エコー）を用いて確認しており、看護師によるエコー活用への社会実装をすすめていけるよう取り組んでいます。

◆研究者からのメッセージ

臨床での看護経験において、認知症高齢者のケアの難しさを感じるとともに、探求された看護が高齢者の安寧につながる看護の力を実感してきました。認知症高齢者が穏やかに療養できるよう、今後もケア実践上にある課題に対して研究を進めていきたいと考えています。また、認知症を含む高齢者は加齢の変化で摂食嚥下機能低下が生じやすくなりますが、できるかぎり長くおいしく「食べる」を実現できるように、摂食嚥下障害のある高齢者への看護に今後も取り組んでいきたいと考えています。

◆講義・研修可能な内容

認知症高齢者へのケア関連、認知症ケアに関するシミュレーション教育、高齢者の摂食嚥下機能低下に対する看護について。

◆研究キーワード

認知症高齢者、シミュレーション教育、認知症模擬患者、摂食嚥下障害、小型超音波診断装置



認知症ケアに関する質評価指標





認知症模擬患者を活用した
シミュレーション教育



エコーを用いた咽頭残留の確認

深谷　由美(Fukaya　Yumi)

准教授　　在宅看護学領域



地域で暮らす人々を支援する支援者に関する研究

◆研究シーズの内容

１．通所介護の看護職の質の向上を目指した研究

通所介護とは、介護保険制度において日常生活上の世話や機能訓練を行うこととされていますが、介護者のレスパイトや介護者が仕事と介護を両立するための役割も担っています。地域には医療的ケアが必要な方もいらっしゃいます。医療的ケアが必要であっても住み慣れた地域で自分らしく暮らすために通所介護の看護職に必要なことについて研究を行っています。

２．デスカンファレンス関する研究

地域で暮らす療養者と関わる支援者は、療養者との関りも長く、療養者が死を迎えたときのストレスは大きい。そのため職種や事業所を超えてデスカンファレンスを行うことで支援者の悲嘆の軽減とケアの質の向上に繋がるといわれており、取り組んでいきたいと考えています。

◆研究者からのメッセージ

地域で暮らす全ての人が安全に安心して、自立した生活をおくれるように、医療・保健・福祉の人々の支援について一緒に考えていきたいと思っています。

◆講義・研修可能な内容

地域で暮らす生活者に必要な法や制度・サービス

多職種連携・フレイル

◆研究キーワード

通所介護　多職種協働　デスカンファレンス

神道　那実　(Jindo Nami)

准教授　　小児看護領域



子どもの慢性疾患・プレパレーションに関する研究

◆研究シーズの内容

１．子どもの力を引き出すプレパレーションに関する研究

小児看護では、子どもの発達段階に応じた説明や環境を整えることで子ども自身がもっている力（対処能力）を引き出すような関わり「プレパレーション」が重要とされています。これまでの研究で、多くの看護師がプレパレーションの必要性を認識しているにも関わらず、実践が難しい現状が明らかになりました。プレパレーションが日常の看護として定着することを目指し、現在は手術を受ける子どもへの術前看護について、病院との共同研究を行っています。

２．慢性疾患の子どもの療養生活に関する研究

医療の進歩に伴い、慢性疾患をもつ子どもが地域で生活できるようになりました。その一方で、セルフケアや成長発達上の問題など様々な困難も生じています。そのため、慢性疾患をもちながら地域で生活する子どもに焦点をあてた研究に取り組んでいます。

◆研究者からのメッセージ

子どもはたくさんの〝力“をもっています。子どもがもっている力を信じ、その力を最大限発揮できるような看護について、子どもに関わる専門職やご家族の方々と一緒に考えていきたいと思っています。

◆講義・研修可能な内容

子どもの成長発達、慢性疾患をもつ子どもの看護、プレパレーションに関する内容

◆研究キーワード

小児　プレパレーション　慢性疾患



原田　真澄　(Harada Masumi)

准教授　　精神看護領域



精神障がいをもつ人とその家族の支援に関する研究

◆研究シーズの内容

１．地域で暮らす中高年の精神障がいをもつ人とその家族への支援に関する研究

精神障がいをもつ人は、環境の変化に対する脆弱性を有しています。高齢の親の健康状態の悪化や親の死などに直面した場合、それらの変化に適応することは、精神障がいをもつ人や家族にとって容易なことではなく、家族の危機状態であると考えられます。

これまで、精神障がいをもつ患者に限らず、成人期から老年期の患者の家族の危機に対する看護職の捉え方を明らかにしてきました。それらを踏まえて、中高年の精神障がいをもつ人と高齢の親からなる家族に対する支援として、支援者があらかじめ準備しておくと役立つリストの開発に取り組んでいます。

◆研究者からのメッセージ

精神障がいをもつ人とその家族が、地域で安心して自分らしい暮らしをすることができるよう、家族の危機状態に対する支援方法の開発に取り組んでいきたいと考えています。

◆講義・研修可能な内容

・成人期から老年期の患者の家族の危機に対する看護職の捉え方

・地域で暮らす中高年の精神障がいをもつの人の家族の関係性の特徴

◆研究キーワード

精神障がい者　家族の危機　準備

竹内　貴子　（Takeuchi Takako）

講師　　基礎看護学領域

学生への看護過程の教育に関する研究

◆研究シーズの内容

看護過程の展開は、初学者にとっては難しい学習内容です。

看護の対象の理解できるように、また看護診断が理解できるように、効果的な教育を目指しています。

◆研究者からのメッセージ

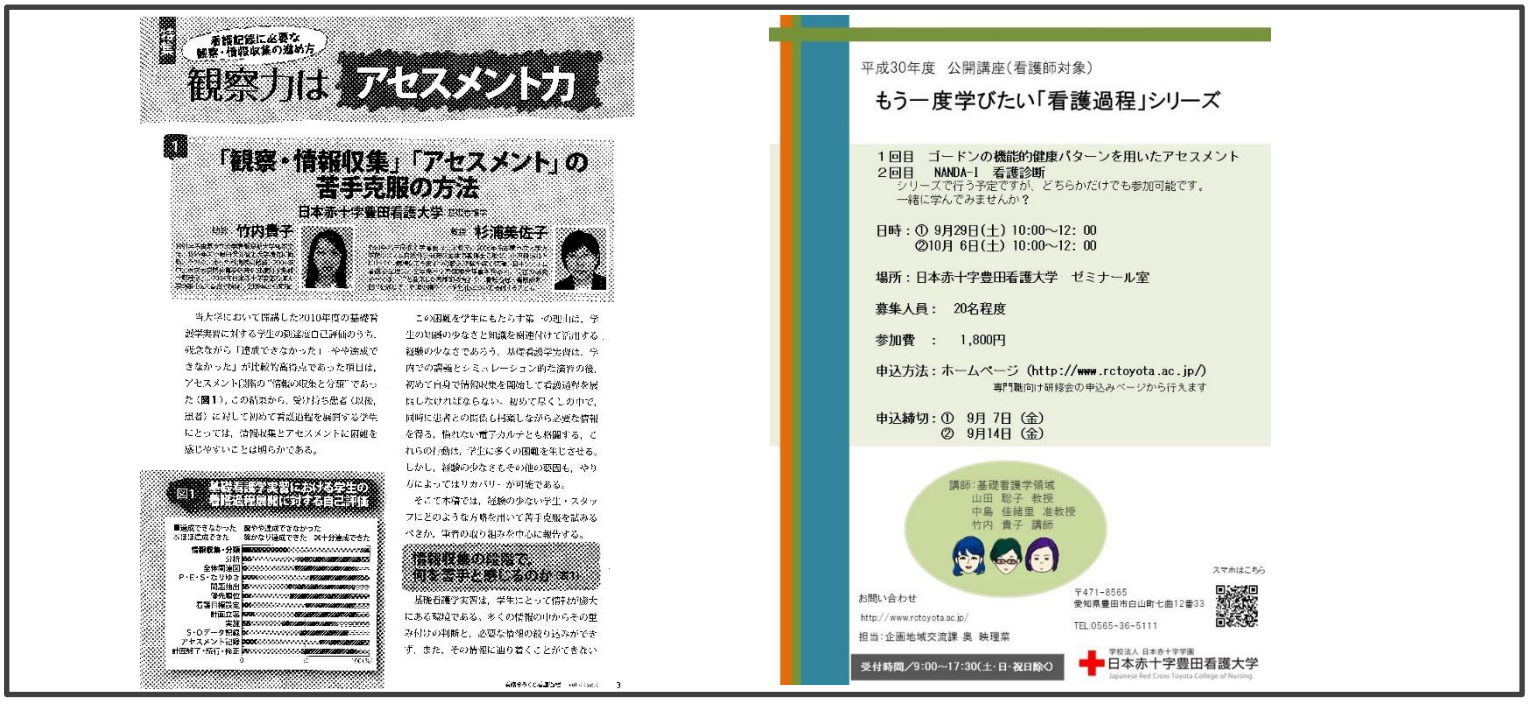
臨床では当たり前のように実践されている思考過程ですが、思考過程を言葉で伝えられるようにしたいと思います。

◆講義・研修可能な内容

学生に向けて行っている教育を紹介することが可能です。

◆研究キーワード

看護過程　基礎看護学



大西　幸恵　（Onishi Yukie）

講師　基礎看護学領域



プロフェッショナリズム教育に関する研究

◆研究シーズの内容

１．看護大学生のプロフェッショナリズム育成を目指した教育プログラムに関する研究

優れた看護専門職の養成は看護系大学の使命とされています。プロフェッショナリズムは将来看護専門職を目指す看護系大学生に求められる基本的な資質・能力の一つです。プロフェッショナリズムにはさまざまな意味があり、明確な定義はありませんが、ここでは、看護専門職としての物の見方や考え方、持っている専門的な知識を活かし、看護専門職として態度や姿勢、実際の行動に移して表出することであると考えます。これらを踏まえ、看護学士課程におけるプロフェッショナリズム教育の問題や教育者と学習者のニーズを検討し、プロフェッショナリズム育成のためのプログラム案の開発に取り組んでいます。

◆研究者からのメッセージ

看護大学生のプロフェッショナリズムを育むために、臨床現場や教育現場の方々と教育内容や方法を検討し、協力していきたいと考えています。

◆講義・研修可能な内容

プロフェッショナリズムについて、プロフェッショナリズム教育に関する研究の動向について

◆研究キーワード

看護大学生　プロフェッショナリズム教育

田中　慎吾　（Tanaka Shingo）

講師　　看護管理学看護領域

病院における看護組織のマネジメント

◆研究シーズの内容

１．患者の移送に関する研究

転床や退院、転院といったように、看護師は日々様々な患者の移送に携わります。先行研究では転床は患者のアウトカムに悪影響を与えることや、不十分な退院支援は再入院や退院後の療養環境でのケアの質に影響を及ぼすことが報告されています。私はこれまで、病棟内で発生する転床の実態やその影響要因の検証、退院支援にかかわる病棟看護師の認識と退院支援実践の関連について研究してきました。現在は退院支援看護師/ 退院調整看護師の方の退院支援に関する認識を明らかにする研究に取り組んでいます。

２．管理者がスタッフに与える影響

感覚としては師長や看護部長など管理者がスタッフや組織に与える影響は非常に大きい一方で、その影響や関連性の可視化は難しいです。現在は管理者の認識や行動・態度がスタッフパフォーマンスや職場への適応に与える影響について検証する研究を計画中です。

◆研究者からのメッセージ

劇的な変化を求められ続ける医療現場において、看護師一人ひとりがその状況に適応対応していくことが求められます。一方で、疲弊し続ける労働環境でさらに自己研鑽や職務内容の追加を行うことは困難を伴います。臨床現場で客観的事実として何が起こっているのか（実態把握）、何がどのように関係しているのか（関連要因の特定）を行うことで、現場スタッフ負担を取り除きながらケアを改善できる方法を研究を通じて解明していきたいと考えています。

◆講義・研修可能な内容

リーダーシップ、組織変革、看護業務への病院建築の影響、新入職員のキャリア開発および職場定着

◆研究キーワード

転床、入退院支援、施設間連携、人材開発

近藤　香苗　(Kondo Kanae)

講師　　老年看護学領域



高齢者・慢性呼吸器疾患患者の健康支援に関する研究

◆研究シーズの内容

1. COPD患者への療養支援に関する研究

慢性閉塞性肺疾患（COPD）では、禁煙や増悪予防、症状管理などを継続するための患者教育が重要です。これまで、COPD患者に対する看護師の教育実践と、それに関連する看護師の自己効力感や学習経験について研究してきました。また、COVID-19流行前後における日本のたばこ販売量、世帯のたばこ支出額および喫煙率の推移を、全国レベルのデータを用いて検討しました。今後も、慢性呼吸器疾患の予防と療養生活を支える看護について研究を進めていきます。

2. 老年看護学教育・看護職の学習に関する研究

高齢者の機能維持と自立を支援するためには、対象者の状態を捉え、活動と休息のバランスを判断する力が求められます。これまで、高齢者への援助に必要な臨床判断力の獲得を意図した学習プログラムを作成してきました。また、看護職の学習意欲、主体性およびワーク・エンゲイジメントの関連について研究し、看護職の成長と実践を支える教育のあり方を検討しています。

◆研究者からのメッセージ

高齢者や慢性呼吸器疾患患者が、その人らしい生活を続けるための看護支援を探究しています。患者への支援だけでなく、支援を担う看護職の学びや成長にも目を向け、臨床と教育に役立つ研究を目指しています。

◆講義・研修可能な内容

慢性閉塞性肺疾患を持つ高齢者の看護

◆研究キーワード

慢性閉塞性肺疾患（COPD）／患者教育／喫煙関連／高齢者看護／看護職の主体性/量的研究

表 1. 臨床判断力の獲得を意図した学習プログラム

臨床判断力の獲得を意図した学習プログラム

ねらい：a) COPDと慢性心不全のある高齢者の情報を「解釈」して、b) 現在の病状や活動耐性低下の状態であること・今後の悪化のリスクを「解釈」し、c) 適切な1日の活動や休息の取り方の計画を立案「反応」できるようになること、また計画を実施したと想定したその後の高齢者の状態観察をした結果から、d) 計画の評価とともに自己の臨床判断について「省察」する。

目的：その場面ごとに学生がバイタルサインの呼吸音や尿量の異常や変化に気づき、それが呼吸不全、心不全の徴候であることや、その要因として1日の活動量や休息量、高齢者の身体機能に伴う活動耐性低下によるものであると判断ができる。

	目標	学習課題	方法
1日目	①COPDと心不全の病態が理解できる ②COPDと心不全の徴候の機序が理解できる ③高齢者の病状のアセスメントができる	①一般的な高齢者の心肺機能の状態を説明する ・加齢に伴う心・血管系、呼吸器系の構造と機能の変化 ②COPDによる労作時息切れの機序と呼吸数増加による悪影響について説明できる ・COPDの病態（気腫化と気管支炎） ・低酸素血症の機序、併存症と呼吸への影響、COPDによる肺高血圧 ・低酸素血症から生じるバイタルサインの変化や症状 ③心不全の病態から易疲労やバイタルサインはどのように変化するのかを説明できる ・心不全（拡張不全、収縮不全）の病態、動脈硬化による血圧の変化 ・左心不全、右心不全の症状とその機序 ④薬剤による心肺機能低下をきたす悪循環を理解する ・疾患・加齢による活動耐性低下と身体活動低下 ・COPDの併存症、フレイルサイクルの悪循環 ・身体活動を維持する意義 ⑤COPD、心不全の高齢者に必要な看護	①学内実習のオリエンテーション ・学内実習について説明を受ける ・事例を提示、学習目標、学習課題について説明 ・1グループ5名の4グループに分かれ、各グループの担当教員を決定し学生の紹介、反応にすぐに対応、指導できる体制 ②個人ワークで課題を学習し、それぞれの学習課題についての理解について指導を受ける ③事例高齢者の看護過程の展開 ・アセスメントと関連図作成
2日目	④アセスメント結果を統合し全体像をとらえることができる ⑤高齢者の活動と休息のバランスが取れる1日の過ごし方を計画できる	①活動耐性低下による生活への影響についてアセスメント ②どのように活動ができることが高齢者にとってよいのかを考える ・事例高齢者の活動におけるニーズはどのようなことがあるのか考える ・QOL（本人の望み、楽しみ、暮らし）はどのようなことか、高齢者の言動などの様子から考える ③活動耐性低下によって事例高齢者の望む生活が脅かされるリスク、COPD、心不全の徴候をどのように判断するのかについて考える ・Borgスケール、MET、脈拍の活用 ・活動の質・種類動態への影響 ④1日の活動と休息における援助を考える ⑤症状の悪化の徴候を判断するための観察について観察のタイミングと内容について考える	①学習目標、学習課題について説明を受ける ②事例高齢者の看護過程の展開 ・関連図の完成と看護計画立案 ③臨地実習で1日受け持つことを想定し、②で立案した計画実施を踏まえた援助計画を立案 ④観察はいつ、どのようなことを観察するのか、観察計画を立案 ⑤個人で判断した上で、グループワークに参加 ⑥活動耐性低下による生活への影響と必要な援助について、グループごとに発表し全体討議
3日目	⑥必要な観察ができる ⑦観察で得た情報を解釈して状態を判断できる ⑧状態に応じた観察・援助計画を立案できる	①適切な観察と測定方法で聴診、観察を行う ②影響性副雑音（捻髪音、水泡音）、連続性副雑音（いびき音、笛音）のタイミング（吸気、呼気）と音の発生する原因や機序について説明できる ③心基部と心尖部の音の違いがわかる ④心音のⅠ音、Ⅱ音、Ⅲ音、Ⅳ音の聴取できるタイミング（収縮期、拡張期）とⅢ音、Ⅳ音の発生する原因と機序を理解する ⑤高齢者の不整脈の出現について理解し、脈拍測定時は、触診にてリズムが一定であるのかどうかわかる ⑥血圧の原理と高齢者の収縮期圧上昇と拡張期圧低下を理解する ⑦SPO2の測定される原理を理解する	①呼吸音の聴診方法と心音の聴診の方法について確認 ・聴診器の膜面とベル面とあて方 ・肺、気管支の位置と呼吸音聴取の位置 ・呼吸音の影響性副雑音（捻髪音、水泡音）・連続性副雑音（いびき音、笛音）のタイミング（吸気、呼気）と音の発生する原因や機序について確認 ・Ⅰ音、Ⅱ音、Ⅲ音、Ⅳ音の聴取できるタイミング（収縮期、拡張期）とⅢ音、Ⅳ音の発生する原因と機序を確認 ・心音の確認する位置（大動脈弁領域、肺動脈弁領域、エルブ領域、三尖弁領域、僧帽弁領域の位置）と心音の違いを確認 ②呼吸音、心音聴取（部位、聴診器のあて方、方法）の確認 ・シミュレーターを用いて呼吸音、心音の聴取、呼吸音、心音の判別を行う ・血圧、脈拍測定

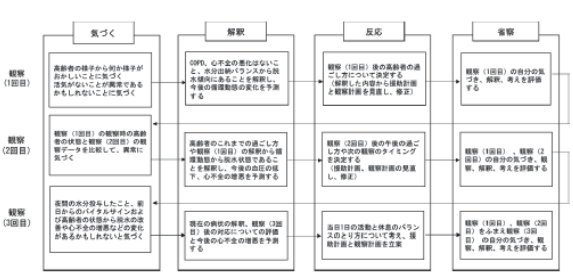


図 2. 学習プログラムにおける臨床判断の展開

高齢者に対する活動と休息の援助における臨床判断力の獲得を意図した学習プログラム

大林　実菜　（Obayashi Mina）

講師　　在宅看護領域



心不全療養者の支援に関する研究

◆研究シーズの内容

１．在宅心不全療養者のセルフマネジメント促進に向けた研究

　これまでに、高齢慢性心不全患者のセルフケア評価尺度の開発を行いました。光栄にも多くの方に本尺度を使用して頂いています。多くの看護師や研究者らが心不全のセルフケア・セルフマネジメントに対し介入し支援していますが、現在も心不全罹患者数は増加の一途を辿っており、再入院率が高いことが課題です。心不全増悪・再入院を避けながら在宅療養生活を続けるには、訪問看護の存在が重要だと考えます。現在は、訪問看護における在宅心不全療養者のセルフマネジメント促進に向けた研究について取り組んでいます。

２．心不全の末期・終末期ケアに関する研究

　心不全は増悪と寛解を繰り返すため、予後予測が困難と言われています。これまでに、病院における慢性心不全末期・終末期看護ケアのプロセスに焦点を当てた質評価指標の開発を行いました。具体的看護内容が示された指標が、実践したケアを振り返るツールや看護実践の指針として活用され、ケアの質向上につながることを目指しています。

◆研究者からのメッセージ

　循環器病棟で働いていると、入院を繰り返す心不全の患者さんに多く出会います。入院を繰り返す心不全の方に訪問看護が入るケースもたくさんあり、訪問看護は様々な困難や課題を抱えながら在宅療養を支援しています。今後もその困難や課題に向き合い、心不全の方が安心して療養生活を継続できることを目指して、研究に取り組んでいきたいと考えています。

◆講義・研修可能な内容

心不全セルフマネジメントに関すること、在宅心不全療養者への支援に関することなど

◆研究キーワード

心不全　訪問看護　セルフマネジメント

千葉　朝子　(Chiba Asako)

講師　　母性看護領域



母乳育児をする母親・女性の心地よさに関する研究

◆研究シーズの内容

１．母乳育児をする母親の心地よさの向上を目指す研究

１日に何度も行う授乳が心地よいものになれば育児の楽しさにもつながると思います。出産施設退院後、セルフケアで授乳を行う母親が母乳育児に心地よさを感じながら授乳できているかの把握ができれば、より適切なケアの提供が可能になると考え、「母親が母乳育児に感じる心地よさ尺度」を開発しました。尺度を使用し、心地よさが感じられない因子などを特定し、母親がより心地よく母乳育児が継続していけるような研究をしています。

２．アロマハンドマッサージによるリラクゼーションケアに関する研究

不妊治療中の女性を対象に行ったアロマハンドマッサージの研究結果から、リラックス効果を実証しました。今後は女性のライフステージの枠を広げ、女性の不調に対する効果についても検証し、女性のウエル・ビーイングの向上につながるようなケアを提供していきたいと考えています。

◆研究者からのメッセージ

心地よいと感じることはリラクゼーションにつながり、ストレスの軽減にもつながります。心地よさにつながるようなケアに取り組んでいきたいと考えています。女性のライフサイクルのウエル・ビーイングの向上に貢献できるような研究を目指しています。

◆講義・研修可能な内容

アロマセラピーについての知識やアロマハンドマッサージの方法などについての講義を行います。

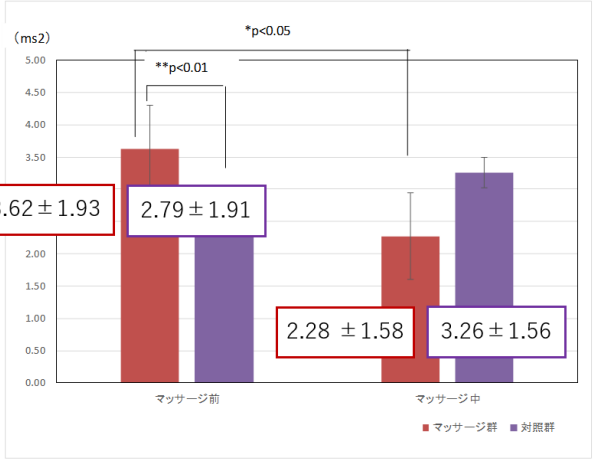
◆研究キーワード

母乳育児　心地よさ　女性　アロマハンドマッサージ



アロマハンドマッサージにおけるリラックス効果

マッサージ群、対照群におけるLF/HFの比較



遠藤　幸子（Endo Sachiko）

講師　　小児看護領域



地域における小児看護・保育保健における多職種連携

◆研究シーズの内容

1．地域における小児看護

　慢性疾患や障害をもち、治療や療養しながら成長発達していく子どもや家族に必要な看護について追究しています。

2．保育保健における多職種連携

　保育所では低年齢児の入所が増加する中、アレルギー疾患や医療的ケアを要する子どもの保育ニーズも急増しています。そこで、看護師は医療専門職として保育士や園医、教員、栄養士等、多職種とともに協働することが必要不可欠と考えます。看護師の専門的役割、多職種連携の在り方を継続して研究しています。現在、東海保育保健研究会では保育所看護職や園長、保育士、小児看護学教員、保育士養成校教員等とともに、保育保健に関する学習会や研修会を企画し、相互に情報交換や研鑽の機会を設けています。

◆研究者からのメッセージ

　成長発達途上にある子どもが健やかに育つこと、病気ををもつ子どもと家族が地域で安心して生活できるように、様々な専門家とともに取り組んでいきたいと考えています。

◆講義・研修可能な内容

赤十字幼児安全法に基づく子どもの応急手当、乳幼児の一次救命処置に関すること

地域の子育て支援、乳幼児への防災対策、子どもの防災教育に関すること

◆研究キーワード

保育所看護職　　保育保健活動　　食物アレルギー



神谷　美帆　(Kamiya Miho)

講師　　小児看護領域



子どもの力を支える看護に関する研究

◆研究シーズの内容

１．短期入院で計画手術を受ける子どもの力を支える看護に関する研究

医療の進歩により、子どもであっても手術療法などを受けることで、その後の長い人生をより良い健康状況で過ごすことができるようになっています。加えて、入院期間も短縮化され、手術部位の完治の前に自宅に戻ることとなっています。

入院中、子どもや家族は、短期間のうちに、入院する病棟や手術室などといった複数の新しい場所で、新しい体験をしています。特に、繰り返し入院を必要としない疾患での手術を受ける子どもが「入院と手術を頑張った」体験にするための援助が子どもの達成感を促進するために必要であると考え、研究を行っています。

◆研究者からのメッセージ

子どもの入院する施設がどのような場であっても、子どもの「僕／わたし、頑張ったよ。」を支える看護のポイントが言語化され、子ども、家族、そしてケアをする看護師も「できた！」といった達成感を得られる実践を検討して行きたいと考えています。

◆研究キーワード

小児看護　短期入院　計画手術　小児病棟　混合病棟

飯田　大輔　(Iida Daisuke)

講師　　精神看護領域

システム理論に基づく組織への支援

◆研究シーズの内容

1．災害派遣チームのメンタルヘルスとチームの在り方について

災害支援者のメンタルヘルスに影響を与える因子について、個人内特性だけでなく、災害派遣チーム内の関係性や環境からの影響についても注目し研究を行っています。また、PTSDや惨事ストレスの低減、予防を目的としたチームの在り方についても明らかにしたいと考えています。その際に、チーム構成員に求められるコンピテンシーにも着目し、災害派遣チームにおける看護師や心理士について状況に応じた判断のもと、適切な行動を選択できる能力を解明することでコンピテンシーモデルを作成する予定です。

2．日本でのオープンダイアローグの実践可能性について

フィンランドで開発され日本の精神科医療でも注目されているオープンダイアローグについて、日本でも実践していくために、日本の医療現場に合わせた方法について研究しております。

◆研究者からのメッセージ

精神看護とは対象との対人プロセスを通した生活援助が特徴的であると言えます。その実践課程においては、常に対象との相互作用（コミュニケーション）が展開していいます。コミュニケーションを考える際には、対象についてだけを見立てるのではなく、自分と対象との間にどのような相互作用が展開されているのかを考える必要が出てきます。その際にシステム理論やナラティブ・アプローチに基づく考え方が必要であると考えております。

◆講義・研修可能な内容

・コミュニケーション：臨床心理学的知見やシステム理論を用いたコミュニケーションの見立てと技法を解説します。

・精神疾患を抱える人との関わり方：発達障害や気分障害等を抱える人との関わり方を解説します。

◆研究キーワード

システム理論　ナラティヴ・ベイスト・メディスン



大森　美保　（Omori Miho）

講師　　公衆衛生看護領域



職場のソーシャル・キャピタルに関する研究

◆研究シーズの内容

１．職場のソーシャル・キャピタルを活用した研究

ソーシャル・キャピタルは人々の絆ともいわれ、この無形資源を活用した健康づくりが注目されています。これまでに、働く人を対象とし、ソーシャル・キャピタルと労働生産性、ソーシャル・キャピタルとワーク・エンゲイジメント、ソーシャル・キャピタル労働災などの関係性を明らかにしてきました。これらを踏まえて、2023年度から事業所の健康づくりにおける職場のソーシャル・キャピタルの活用に関する研究に取り組んでいます。

２．産業看護に関する研究

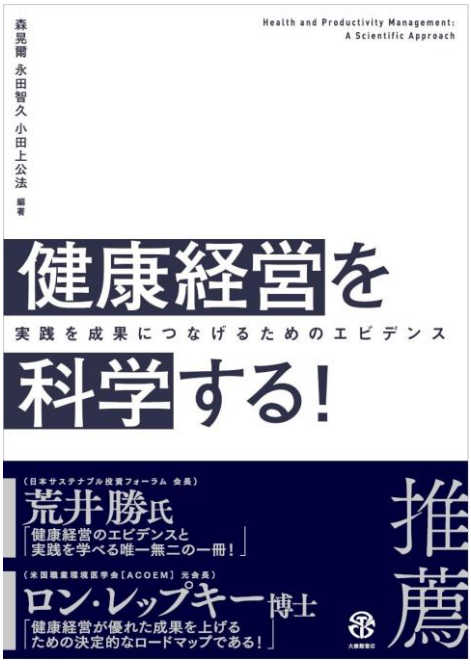
産業看護職は、働く人のみならず、その人々が高齢者になってもいきいきと生活し、経済活動に参加し続けられるよう、働き世代からの健康づくりを支援しています。現在は、産業看護職の能力の評価の実態、産業看護系における実習に関する研究を行っています。

◆研究者からのメッセージ

働く人がいきいきと働ける職場環境づくりの開発や産業看護職に関する研究について、働く人々や事業者、実践者の皆さんと一緒に取り組むことで、いきいきと働けるお手伝いができればと思います。

◆研究キーワード

ソーシャル・キャピタル、働く人、労働生産性、産業看護



高下　翔　（Takashita Sho）

助教　　基礎看護学領域



エコーを用いた全身麻酔患者に関する研究

◆研究シーズの内容

1．超音波画像診断装置（エコー）を用いた気管チューブカフ上部分泌物に関する研究

術後の呼吸器合併症として術後肺炎がありますが、気管チューブによる人工呼吸管理患者はカフ上部に分泌物が貯留します。気管チューブの抜管時に、カフ脱気に伴いカフ上分泌物が下気道に流入する可能性があるものの、カフ上部にどの程度分泌物が貯留しているかが明らかでないため、非侵襲的に評価できるエコーでカフ上部分泌物の貯留状況の評価に取り組んでいます。

◆研究者からのメッセージ

看護教育および看護技術開発に関する分野に関心があります。

◆研究キーワード

超音波画像診断装置（エコー）　気管チューブ　カフ上部分泌物

福岡　友理恵　(Fukuoka Yurie)

助教　　基礎看護領域



実地指導者に関する研究

◆研究シーズの内容

１．実地指導者の役割遂行状況と関連要因について

実地指導者は、新人看護師の臨床実践能力を高め、臨床現場と看護基礎教育の乖離を埋めるための重要で欠かせない存在ですが、困難感や負担感を抱えながら指導者役割を担っていることが先行研究から推測されます。このことから、現在、実地指導者の役割遂行を促進するものは何かという研究を行っています。

役割を遂行することに困難を感じている実地指導者を少なくし、実地指導者が新人看護師に対して適切な指導を行うことで、将来的には新人看護師の離職率の低減に繋げていきたいと考えています。

◆研究者からのメッセージ

実地指導者の役割遂行や新人看護師への教育・支援などに関心があり、研究に取り組んでいます。

◆研究キーワード

実地指導者、役割遂行、支援状況

山中　大輔　(Yamanaka Daisuke)

助教　　基礎看護領域



看護系大学におけるキャリア教育に関する研究

◆研究シーズの内容

１．看護系大学におけるキャリア教育の質向上を目指した研究

看護師国家試験を合格した後の、看護職の働く場所が多様化している現代において、1人でも多くの看護職が生涯にわたり“看護”と繋がっていくためには、看護基礎教育からキャリアについて考える素地の育成が必要なのではないかと考え、看護系大学におけるキャリア教育について研究をしています。

修士論文では、全国の看護系大学のシラバス調査を行い、キャリア教育の現状について明らかにしました。さらに、実際に必修科目としてキャリア教育科目を開講している大学の科目責任者を対象にしたインタビュー調査を行い、看護大学生にキャリア教育科目を教授する上での課題として、看護大学生の特徴・個人差に関する課題、看護系大学においてキャリア教育を教授する側の課題、行ったキャリア教育の教育効果の評価に関する課題の3つの課題があることを明らかにしました。

◆研究者からのメッセージ

１人でも多くの看護職が生涯“看護”と向き合い、繋がっていくことで、看護学が学問として発展していくことにも繋がっていくと考えております。今後の研究では、看護系大学におけるキャリア教育の質向上へ直接的に影響を及ぼす教育プログラムの開発を目指し日々取り組んでいきたいと考えております。

◆研究キーワード

キャリア教育　看護基礎教育

三浦　翔子　（Miura Shoko）

助教　　基礎看護領域



医療的ケア児の看護ケアに関する研究

◆研究シーズの内容

１．熟練看護師が行う医療的ケア児のレスパイトケアの可視化に関する研究

医療の高度化などを背景に、地域で生活する医療的ケア児の数は年々増加しています。子どもと家族の在宅生活を支える上で、家族の休息や子どもの社会参加につながるレスパイトサービスへのニーズは高まっており、従来受け入れを行ってきた重症心身障害児（者）施設等に加えて、地域の急性期病院や小児病棟における受け入れへの期待も高まっています。

一方で、受け入れに際しては急性期医療を提供しながら、在宅で行われている個別性の高いケアや様々な医療機器や疾患への対応などが求められます。現場では多くの看護師が工夫を重ねながらケアを実践していますが、経験豊富な看護師がどのような点に着目し、どのようにケアを行っているかについて十分に可視化されていません。

そこで、経験豊富な熟練看護師のケア実践を可視化し、その知見を共有・活用できるツールの開発を目指しています。これにより、医療的ケア児のレスパイトケアに携わる看護師を支援し、より安心してケアを提供できる環境づくりに貢献したいと考えております。

◆研究者からのメッセージ

医療的ケア児のレスパイトケアは、病棟や地域など様々な現場で子どもや家族と向き合う看護師の方々の知見や経験に支えられています。本研究では、その実践知を大切にしながら可視化し、現場の方々や当事者、ご家族とともに、より安心してケアを提供できる環境づくりにつなげていきたいと考えています。

◆研究キーワード

医療的ケア児　レスパイト　看護ケア

田口　栄子　(Taguchi Eiko)

助教　　成人看護領域

看護の場におけるユーモアの意味と活用の研究

◆研究シーズの内容

１．ユーモアのもつ意味とその活用

臨床、看護の場において、ユーモアは人間をくつろがせ、心を解放します。また、互いに他をいたわり合い、心が通い合うようにさせます。そして第三者的な高い視点に立たせることによって、おかれた状況の苦しさ、さらには死の恐怖をも乗り越えさせる力があります。このような自己超越能力は、人間に秘められた素晴らしい能力です。したがって、看護師をはじめとして医療従事者がユーモア感覚を磨き、看護や臨床の場において意図的にユーモアを使っていくことは、患者やその家族が病気の苦しみやその恐怖を乗り越えていくために意味のあるものだと考えています。

◆研究者からのメッセージ

看護の場においてユーモアが重要であることはよく知られているところですが、実際にユーモア感覚をどのように磨いていったらよいのでしょうか。今、考えられることは、まずは関心をもって、臨床や看護の場においてユーモアがあった場面を覚えておくこと、そして、自分もそのユーモアを実際に使ってみることだと考えています。

◆研究キーワード

ユーモア、プラス思考、思いやり、自己超越、病苦・死の恐怖の克服

谷口　純平　(Taniguchi Junpei)

助教　　成人看護領域



せん妄発症予防に関する研究

◆研究シーズの内容

１．せん妄発症を予防するためのケアの特徴に関する研究

少子高齢化がすすむ一方で、近年の医療技術は目覚ましい進歩を遂げており、年齢を問わず積極的な手術や侵襲的な集中治療管理が行われています。このような背景から、急性期病棟や集中治療下におかれている対象者のせん妄の発症率は、今後ますます増加することが懸念されています。せん妄の発症は認知機能の低下や死亡率の増加につながるだけでなく、対応の難しさから看護職のケアの困難感にもつながっています。それらを踏まえて、せん妄発症の予防につながるケアの特徴を明らかにし、対象者のQOLの向上や看護職の負担の軽減に資するための研究を行っています。

◆研究者からのメッセージ

人生100年時代となり、地域で健康にそしてその人らしく生活する時間が延伸しています。その中で、生命予後を悪化させるせん妄に対して、発症を予防するためのケアを明らかにするための研究に取り組んでいきたいと考えています。

◆研究キーワード

せん妄　せん妄発症予防

石田　咲　（Ishida Emi）

助教　　成人看護領域



高齢者の口腔ケア・感染予防に関する研究

◆研究シーズの内容

１．高齢者の口腔ケアに関する研究

わが国では高齢者が増加しており、高齢者の療養の場は在宅に移行しています。地域包括ケアシステムが推進されることで、在宅で過ごす高齢者が増加し、在宅や通所事業所における看護師の需要は高まると考えられます。口腔に関する施策が立てられていますが、通所事業所や訪問看護では歯や口腔に関する取り組みは十分とは言えない状況です。そのため、通所事業所を利用する要支援高齢者の口腔に関する調査や在宅で生活する要介護高齢者に実施している口腔ケアの実態の調査を行っています。

２．感染予防に関する研究

ガウンや手袋の着脱動画のモデルや疥癬や結核の動画の音声吹き込みなど介護士や看護師の方々に分かりやすい動画を作成し、感染予防に役立つような活動を行っています。

◆研究者からのメッセージ

今後ますます需要が高まると考えられる口腔ケアについての研究に、取り組んでいきたいと考えております。また、動画作成なども一緒に行っていきたいと思っておりますので、お声がけください。

◆研究キーワード

高齢者　口腔ケア　感染予防　動画作成

石原　佳代子　（Ishihara Kayoko）

助教　　成人看護領域



看護職・介護職の口腔ケアに関する研究

◆研究シーズの内容

１．介護保険施設の口腔ケアに関する研究

我が国では少子高齢化による介護職員不足が課題であり、介護を支えるために外国人介護職員の方の存在が欠かせない状況となっています。今後、看護職と外国人介護職員との連携が重要になると考え、外国人介護職員の方の口腔ケアの実態や外国人介護職員の方に対する指導体制に関する研究を行なっています。

２．看護職の口腔ケアに関する研究

医療施設に勤務する看護職の口腔ケアに対する認識や口腔ケアの教育ニーズに関する研究に携わらせていただいています。

３．看護学生の口腔ケアの啓発

看護学生を対象として、口腔ケアの学習や日本口腔ケア学会が認定する資格取得のサポートを行っています。

◆研究者からのメッセージ

口腔ケアを必要とする方に、安全で適切な口腔ケアを提供するための方法や支援について役立てる研究に取り組んでいきたいと考えています。

◆研究キーワード

口腔ケア　高齢者　看護学生



口腔ケアに関する書籍を出版

段　暁楠　（Dan Gyounan）

助教　　老年看護領域



高齢者のエンドオブライフケア・センサーとIoT機器

◆研究シーズの内容

１．病院における高齢者のエンドオブライフケア質向上ツールの汎用性と有用性の検討

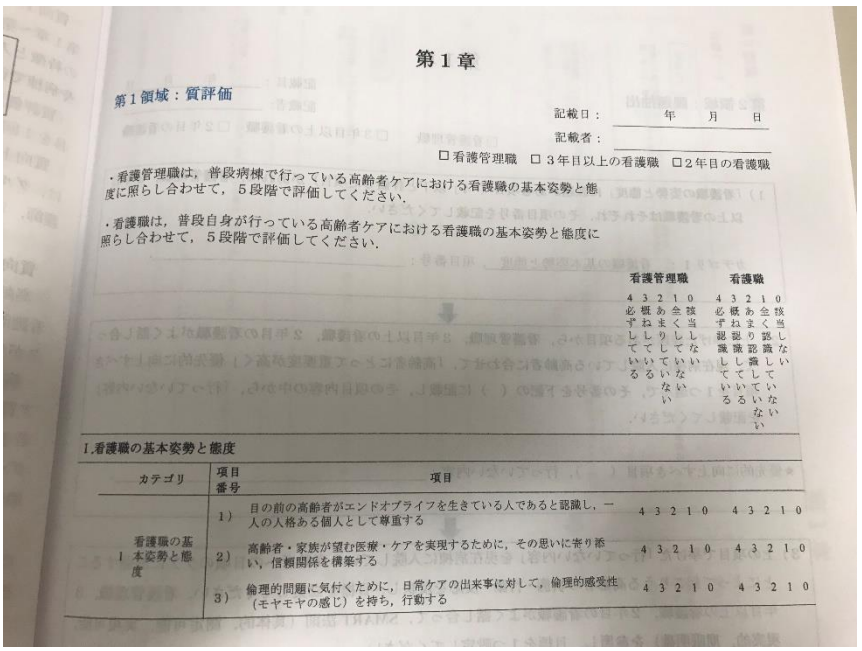
前段階の研究では，病院における高齢者の人生の最終段階のケアの質向上を目指すために，高齢者のエンドオブライフケア質指標とPDCAサイクルをもとに，看護職の基本姿勢と態度（看護のプロセス），高齢者の状況に応じたケア（看護のプロセス），組織の体制づくり（看護の構造）の８章と「質評価」「課題抽出」「質向上」「質再評価」の４領域で構成する「病院における高齢者のエンドオブライフケア質向上ツール」を作成しました。病院の１病棟の看護管理職と看護職，計11名にツールの６項目を使用し，使用によって，「ツールの評価項目をチェックすることで高齢者ケアの不十分な点を把握できた」「ツールは高齢者ケアの質向上のためのツールとして役立つ」などに関する有用性を確認できました。今後の研究では，病院と病棟の数を増やし，使用できなかった質向上ツールの項目を使用し，複数の病院の病棟におけるツールの汎用性と有用性を検討することを目的とします。

◆研究者からのメッセージ

デジタルトランスフォーメーションの発展に伴い，高齢者ケアにおけるIoT機器，センサーとロボットに関する研究を行いたいと考えています。

◆研究キーワード

高齢者のエンドオブライフケア，ケアの質評価と質改善，IoTとセンサー



第１章

第１領域：質評価

記載日：　　年　月　日

記載者：

□看護管理職　□３年目以上の看護職　□２年目の看護職

・看護管理職は，普段病棟で行っている高齢者ケアにおける看護職の基本姿勢と態度に照らし合わせて，５段階で評価してください．

・看護職は，普段自身が行っている高齢者ケアにおける看護職の基本姿勢と態度に照らし合わせて，５段階で評価してください．

		項目	看護管理職	看護職
			4 必ずしている / 3 概ねしている / 2 あまりしていない / 1 全くしていない / 0 該当しない	4 必ず認識している / 3 概ね認識している / 2 あまり認識していない / 1 全く認識していない / 0 該当しない
Ⅰ.看護職の基本姿勢と態度				
カテゴリ	項目番号	項目		
Ⅰ 看護職の基本姿勢と態度	1）	目の前の高齢者がエンドオブライフを生きている人であると認識し，一人の人格ある個人として尊重する	4 3 2 1 0	4 3 2 1 0
	2）	高齢者・家族が望む医療・ケアを実現するために，その思いに寄り添い，信頼関係を構築する	4 3 2 1 0	4 3 2 1 0
	3）	倫理的問題に気付くために，日常ケアの出来事に対して，倫理的感受性（モヤモヤの感じ）を持ち，行動する	4 3 2 1 0	4 3 2 1 0

宝木　百代　（Takaragi Momoyo）

助教　在宅看護領域



介護支援専門員の医療職者との連携に関する研究

◆研究シーズの内容

１．介護支援専門員のターミナルケアマネジメントにおける医療職者との関係づくりについての研究

末期がん患者が自宅で最期を迎えるためには医療、介護の支援が必要となります。介護保険のサービスを受けるためには介護支援専門員の支援が不可欠です。また、介護支援専門員と医師・看護師の連携が図れることで、より質の高い在宅生活を送ることができると考えます。医療職者との連携が苦手な介護支援専門員が少しでもスムーズに関係づくりができるように、熟練介護支援専門員が行っている医療職者との関係づくりについて明らかにしました。熟練介護支援専門員は、ターミナルケアの実践を医療職者任せにせず、医療職者の専門職者としての価値観を受け止め、お互いが協調することを目指して関係を構築していました。今後は、本研究結果について広く介護支援専門員の方に知ってもらい、使ってもらうことができるよう、研究を深めていきたいと考えています。

◆研究者からのメッセージ

介護支援専門員の役割や重要性を知ってもらい、在宅看護における多職種との連携について、実践する多職種の方に活用していただく事ができるようにしたいと考えています。

◆研究キーワード

在宅　介護支援専門員　ターミナルケア　専門職連携　訪問看護

草深　真菜　(Kusabuka Mana)

助教　　母性看護領域



周産期における災害対策に関する研究

◆研究シーズの内容

　災害時、妊産褥婦、新生児の安全を守り、ケアを提供し続けるために役立てられることを目的に、全国産科病棟の災害対策の現状を把握や、災害に対する認知と災害対策行動との関連を明らかにしました。

また、妊婦の防災リテラシーに関する研究をしています。

◆研究者からのメッセージ

　災害時要配慮者となる妊産婦、新生児、またそのご家族へ、切れ目のないケアを提供できるよう災害対策について引き続き研究をしていきたいと考えています。

◆研究キーワード

病院産婦人科　災害対策　集合的防護動機　防災リテラシー

鳥居　賀乃子　（Torii Kanoko）

助教　　小児看護領域



新生児看護・小児看護に関する研究

◆研究シーズの内容

1．新生児集中治療室（NICU）におけるエンドオブライフケアに関する研究

言葉での意思表明が困難な新生児の最善の利益を考えたエンドオブライフケアに関する研究に取り組んでいます。

2．小児看護学領域における教育活動に関する研究

小児看護学領域での学生の学びを支援する基礎教育に関する研究に取り組んでいきたいと考えています。

◆研究者からのメッセージ

子どもたちや家族へのケアについて、新生児看護・小児看護を実践されている方々と共に取り組んでいきたいと考えています。

◆研究キーワード

新生児看護、新生児集中治療室、NICU、小児看護

大学院 看護学研究科 修士課程・博士課程

修士課程 看護学専攻

詳しくは
こちらから

標準修業年限：2年
定員：10名
学位：修士（看護学）

高度な専門性と研究・教育能力を養い、看護学の発展に寄与する人材を養成

修士課程は、赤十字の基本原則に基づく専門教育機関として2010年に開設しました。保健・医療・福祉の現場で高度な専門性を発揮できる看護職者や看護管理者、看護学の発展に寄与する研究・教育者の養成を目指します。

研究者・教育者・高度実践者を養成する課程を開設

医療現場では、高度な専門性を備えた看護職者が求められています。また看護学の進歩と発展に貢献する研究者・教育者の育成も急務です。日本赤十字豊田看護大学では、こうした社会的要請に応える大学院を開設しています。

	概要	領域
研究・教育者コース	看護が必要な様々な場において現場の課題を追求できる研究者や、大学などの教育機関の教育者として活躍する人材の養成を目的としています。3分野9領域で専門性を高め、思考力・教育力・研究力などの能力の開発を目指します。	【基盤育成看護学】 看護管理学　看護教育・技術学 【ケア創生看護学】 成人看護学　母性看護学　小児看護学 【地域共生看護学】 老年・在宅看護学　精神看護学 地域看護学　災害看護学
専門看護師コース	幅広い専門知識とアセスメント力を身につけ、高度な実践力をもって活躍する専門看護師の養成を目的としています。日本看護系大学協議会の認可を受けた教育課程です。修了後は、日本看護協会の慢性疾患看護専門看護師（申請中）、小児看護専門看護師、精神看護専門看護師、老人看護専門看護師の受験資格を得られます。	【ケア創生看護学】 成人看護学　※申請中 （慢性疾患看護専門看護師受験資格） 小児看護学 （小児看護専門看護師受験資格） 【地域共生看護学】 老年・在宅看護学 （老人看護専門看護師受験資格） 精神看護学 （精神看護専門看護師受験資格）
認定看護管理者コース	看護管理学を体系的に学び、看護管理のスペシャリストとして創造的に組織を改革できる視点や能力を身につけた人材の養成を目的としています。看護師長以上の看護管理者経験が3年以上あれば、修了後は、日本看護協会認定看護管理者の受験資格を得られます。	【基盤育成看護学】 看護管理看護学 （認定看護管理者受験資格）

研究指導教員の研究活動

研究指導を主担当する教員名と、各領域の教員の研究活動について紹介します。
各教員への連絡先や詳細はHPを参考にしてください。

詳しくは
こちらから

看護管理学

主研究指導教員：南谷 志野 教授

看護職のキャリアや多様な人材の活用、働き続けられる職場環境など、看護管理学に関連する理論や知識に基づいて、ミクロ・マクロの視点から現場の課題や政策に関する課題についての研究を行っています。

看護教育・技術学

主研究指導教員：山田 聡子 教授

看護基礎教育や継続教育などの人材育成に関する課題、看護技術の開発や習得に関する課題、そして看護倫理に関する課題に取り組んでいます。変化し続ける社会のニーズに柔軟に対応する教育のあり方やケアサイエンスの構築を模索していきます。

成人看護学

主研究指導教員：カルデナス 暁東 教授

慢性心不全等の慢性疾患をもつ患者とその家族の療養生活における自己管理支援、手術療法や化学療法等による外見変化のある患者の生活の質向上支援、異文化背景をもつ患者とその家族への看護支援、外国籍看護師の異文化適応とキャリア支援など、幅広い視点から研究します。

母性看護学

周産期および女性のライフサイクル全般にわたる健康課題に関する研究を行っています。産後うつの低減や母乳育児の促進、育児をする父母の社会的支援など、助産師が関わる幅広い課題に取り組んでいます。

小児看護学

主研究指導教員：岡田 摩理 教授

重症心身障害や医療的ケア、発達障害などの課題をもつ子どもと家族への看護、子育て支援やプレパレーションなどの子どもが健やかに育ち家族と生き生きと暮らせる支援、小児看護の基礎教育に関する研究に取り組んでいます。

老年・在宅看護学

主研究指導教員：百瀬 由美子 教授
小林 尚司 教授

老化や疾病により日常生活に困難がある高齢者の、その人らしい生活を支えるための研究を行っています。療養や生活の場における課題や多職種連携に関する課題など、幅広い課題に取り組んでいます。

精神看護学

主研究指導教員：河野 由理 教授

精神的な健康課題をもつ人への看護援助の特徴や家族の支援に関する研究に取り組んでいます。学校、在宅、病院など様々な場における精神保健問題をもつ人とその家族への看護職・介護職による支援、並びに多職種連携に関して研究を行っています。

地域看護学

主研究指導教員：長谷川 喜代美 教授
森田 一三 教授

行政分野の保健師の活動や、地域住民による保健活動に関する課題について取り組んでいます。地域における健康課題を構造的にとらえ、様々な関係者と連携・協働していく公衆衛生の活動についても探究しています。

災害看護学

主研究指導教員：藤井 愛海 准教授

災害時の健康被害の軽減を目指し、災害関連死の要因や構造を明らかにし、その予防に資する看護実践のあり方を探究しています。また、災害時要配慮者の健康リスクを多面的に分析し、地域に根ざした予防・支援体制の構築に取り組んでいます。

学びのサポート

働きながら学びたい、収入が少ないけれど大学院だけに集中したい、
様々な学び方を希望する人を、学び方に合わせてサポートする制度があります。

詳しくは
こちらから

働きながら学ぶための支援体制

01 昼夜開講

大学院設置基準第14条（教育方法の特例）を適用し、平日日中に加えて、平日夜間、土曜も開講します。一部の授業ではオンライン授業を行っています。

02 サテライトキャンパス（名古屋市）

サテライトキャンパスを日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院（名古屋市昭和区）南の日赤愛知災害管理センターの中に設置し、大学院の授業を行う講義室、情報処理室を整備しています。

03 長期履修制度

2年間の学納金で3年間学習することができる長期履修制度を整備しています。

学費のサポート

01 入学金の減免

1. 日本赤十字豊田看護大学及び日本赤十字愛知短期大学を卒業した者又は見込みの者は、全額を免除します。
2. 下記の入学者は半額を免除します。

❶ 上記1以外の学校法人日本赤十字学園が設置する大学を卒業した者又は卒業見込みの者
❷ 上記1以外の学校法人日本赤十字学園が設置する短期大学を卒業した者
❸ 日本赤十字社看護師等養成施設等を卒業した者
❹ 学校法人日本赤十字学園又は日本赤十字社の職員

※詳細は、入試・企画広報課
［TEL.（0565）36-5111］までお問い合わせください。

02 教育訓練給付制度

本学大学院では「教育訓練給付制度厚生労働省指定講座」を実施しています。

●専門実践教育訓練：最大受講費用の80%（年間上限64万円）
●一般教育訓練：受講費用の20%（上限10万円）
対象者はハローワークより上記の額が支給されます。
※支給の条件等、詳細はハローワークにお問い合わせください。

修了後のサポート

本学の修士課程修了生の要望に応じ、CNS・認定看護管理者の資格の取得や更新、または学位論文の学術雑誌への投稿に対して必要なサポートを個別に行っています。

特別枠（学内進学）について

本学の看護学部から大学院修士課程研究・教育者コースへ進学できる特別枠（学内進学）制度があります。
出願条件は以下の2点です。

・累積GPA3.0以上（3年生後期時点）
・進学希望の研究指導教員と事前に面談を行い、内諾を書面で得ている。

特別枠は書類審査のみで受験でき、入学検定料も免除されます。
※上記、特別枠の対象者でない場合でも大学院一般入試での進学ができます。

修了生メッセージ

私が大学院へ進学したきっかけは、看護師長として３年目となり、自分の看護管理はこれでいいのかと考えたからです。当時の看護部長から、日本赤十字豊田看護大学に認定看護管理者コースが開設されると聞き、看護管理について学びを深めたいと思い進学を決めました。大学院では、病棟の管理だけでなく、看護政策がどのように進められているのか、人材を育成するためには何が必要かなど、先生や同級生と広い視点で語り合いながら、自分の看護管理を見直すことができました。卒業後、認定看護管理者の資格も取得し、大学院で学んだ視点を活かして日々楽しく活動しています。

日本赤十字社愛知医療センター 名古屋第二病院　看護副部長　古尾 麻紀さん



長期履修制度を利用した修了生の声

私は、病棟に勤務しながら、今まで携わった看護領域に関する知識を深めたいと考え、長期履修制度を利用して小児看護学領域の研究・教育者コースを履修しました。勤務と履修の両立に不安もありましたが、講義開始時間やゼミの日時などを考慮していただいたこともあり、無事修士を修了することができました。勤務しながら学んだことで、日々の看護での課題についてもディスカッションなどで知識を深めることができ、タイムリーな対応ができたと思います。看護研究では、経験だけに頼らず論理的に考えることや、何事にも粘り強く丁寧に対応する大切さを学び、日々の看護実践へ役立てられていると思っています。

トヨタ記念病院　看護師　外山 さゆりさん



受験希望者へのサポート

受験してみたい、説明を聞いてみたい、授業を見学してみたいけれども、具体的な手続きや必要なことがわからないという方へのサポートです。

開講科目について知りたい

受験方法について知りたい

大学院説明会 （オンラインでの参加も可能）

研究指導を担当する教員と、直接話ができます。受験に必要な手続き、入学試験などについても詳細に説明します。

第１回 2026年6月20日（土）　**第２回** 2026年10月17日（土）

入学試験日程 2027年度入学者向け

入学試験の機会は２回あります。ご準備の状況に合わせて出願ください。

第１回 2026年9月12日（土）　**第２回** 2027年2月13日（土）

問い合わせ先

その他の問い合わせには
随時対応いたします。

入試・企画広報課
TEL:0565-36-5111
Mail:kikaku-ka@rctoyota.ac.jp

多様な学びの機会の提供

聴講生

生涯学習の観点から幅広い教養や専門的知識を深めることを目的に、本学の学生とともに学期を通して学ぶことができます。単位認定はおこないません。

募集時期　前期：1月頃／後期：7月頃

研究生

研究を目的として本学教員の指導を希望する方を研究生として受け入れます。学位を取得することはできません。

募集時期　前期：2月頃／後期：8月頃

詳しくは
こちらから

科目等履修生

大学院で開講されている科目を1科目から学ぶことができます。

募集時期　前期：1月頃／後期：7月頃

履修証明プログラム

専門的な能力を向上するために体系的に学べる教育プログラムです。

募集時期　1月頃

詳しくは
こちらから

履修証明プログラム

本大学院では社会人などを対象として3つの履修証明プログラムを開設しています。これらのプログラムは職業に必要な能力の向上をはかる「職業実践力育成プログラム（BP）」としての認定を受けています。修了者に対して、日本赤十字豊田看護大学 学長名の「履修証明書」が交付されます。

Brush up Program for professional × 大学院発 医療・介護 防災・危機管理

看護教育プログラム

4科目：6単位

臨床現場で教育・指導を行う際に必要となる基本的な知識や教育方法論を理解し、臨床現場における新人教育や現任教育に適用する能力を育成することを目指した看護の専門職業人のための教育プログラムです。

看護研究プログラム

4科目：7単位

看護研究を行う際に必要となる基本的な知識や統計学などの基本、量的・質的研究方法論の概要を修得し、臨床研究に適用する能力を育成することを目指した看護の専門職業人のための教育プログラムです。

災害看護実践プログラム

4科目：2単位

災害時、看護職が人々に寄り添い、生命と健康を守るために多職種と連携した活動をするために必要な知識・技術、能力の育成を目指したプログラムです。特に自施設が被災したときの対応について具体的に学べるよう、講義・演習・実習を組み合わせた実践プログラムです。

博士課程 共同看護学専攻

詳しくは
こちらから

標準修業年限：３年
定員：10名（各大学２名）
学位：博士（看護学）

５つの赤十字の看護大学が共同し、教育・研究指導を実施

共同看護学専攻は、学校法人日本赤十字学園が運営する５大学（日本赤十字北海道看護大学、日本赤十字東北看護大学、日本赤十字豊田看護大学、日本赤十字広島看護大学、日本赤十字九州国際看護大学）が共同で開設した博士課程です。Zoomアプリを使った遠隔授業では、学籍を置く大学の教員のみならず、５つの大学の多様な教員の講義や指導を受けることができ、学生同士の討議や交流も行うことができます。所属大学以外の学内施設についても、事前の届け出を行うことで、各大学で定められた時間内で利用が可能です。
※学生の所属は、主指導教員の在籍大学になります。

博士課程 研究指導教員



教授　百瀬 由美子

フレイル予防、認知症高齢者ケア、家族介護者支援、老年・在宅看護学領域における倫理的課題等に関する研究指導を行う。



教授　岡田 摩理

医療的ケア、重症心身障害、発達障害などにより、地域で看護を必要とする子どもと家族への支援を充実するための研究や、小児看護における教育の課題に関する研究の指導を行う。



教授　山田 聡子

看護基礎教育における臨地実習指導に関する課題や看護倫理教育の在り方、現任教育の在り方に関する課題に焦点をあてた研究指導を行う。



教授　長谷川 喜代美

行政分野の保健師の活動に関する課題、地域ケア体制の構築における保健師の役割、人材育成の在り方と方法等に関する研究指導を行う。



教授　カルデナス暁東

慢性心不全をはじめとした慢性疾患をもつ患者とその家族の療養生活における自己管理、また化学療法など治療法に伴う外見変化のある患者の生活の質を高める看護支援に関する研究指導を行う。



教授　河野 由理

精神保健問題をもつ人とその家族への学校、在宅、病院など多様な場における看護職による支援および多職種協働について研究指導を行う。



教授　南谷 志野

看護職の持続可能なキャリアや働き方、看護管理実践の成果など看護職のwell-beingや社会的地位の向上に寄与できる研究の指導を行う。

教員の連絡先等は
こちらから

修了生メッセージ

日本福祉大学　講師　西岡 裕子さん

私は、研究を遂行するための知識・技術を深めたいと考え、コースワークが充実している日本赤十字豊田看護大学博士課程への進学を決めました。共同看護学専攻では、日本赤十字学園が運営する５大学の先生方からオンラインでの授業や研究指導を受けました。各専門領域の第一線で活躍する教授陣の講義では、様々な研究手法を学ぶことができ、さらに５大学の学生を交えたディスカッションをとおして、新たな考え方や視点を知る貴重な機会となりました。仕事をしながらの講義への参加やデータ収集は大変でしたが、指導教員をはじめとする先生方が丁寧かつ熱心にご指導くださり、前進し続けることができました。

